

平成26年第3回教育委員会臨時会

(8月22日開会)

教科書採択部分のみを抜粋

台東区教育委員会

日 時 平成26年8月22日(金)午前10時10分

場 所 教育委員会室

出席委員

委 員 長	樋 口 清 秀
委員長職務代理者	高 森 大 乗
委 員	末 廣 照 純
委 員	垣 内 恵美子
教 育 長	和 田 人 志

説明のために出席した事務局職員

事 務 局 次 長	神 部 忠 夫
生涯学習推進担当部長	上 野 俊 一
庶 務 課 長	柴 崎 次 郎
学 務 課 長	田 中 充
児 童 保 育 課 長	前 田 幹 生
指 導 課 長	藤 森 克 彦
教育改革担当課長 (兼 教育支援館長)	江 田 真 朗
事 務 局 副 参 事	上 野 守 代
生涯学習課長	飯 塚 さち子
青少年・スポーツ課長	山 本 光 洋
中央図書館長	川 島 俊 二

日 程

日程第1 議案審議

第23号議案 平成27～30年度使用台東区立小学校教科用図書採択について

第24号議案 平成27年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択について

午前10時10分 開会

樋口委員長 ただいまから、平成26年第3回台東区教育委員会臨時会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、高森委員にお願いいたします。

それでは、会議に入ります。

この際、あらかじめ会議時間の延長をいたしておきます。

ここで、傍聴についておはかりいたします。

本日の教育委員会に提出される傍聴願については、あらかじめ許可いたしたいと思えます。

これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 ご異議ございませんので、傍聴については、許可いたします。

日程第1 議案審議

第23号議案

第24号議案

樋口委員長 それでは、日程第1、議案審議に入ります。

第23号議案「平成27～30年度使用台東区立小学校教科用図書採択について」及び、第24号議案「平成27年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択について」を一括して議題といたします。

いずれも8月19日に開催した教育委員会定例会からの継続審議の案件となります。

はじめに、小学校教科用図書の採択について、指導課長より説明をお願い致します。

指導課長 先日、8月19日の定例教育委員会におきましては、教科用図書の採択に関する調査研究、資料作成等の経緯のご報告と、本議案のご審議につきましてご依頼申し上げたところでございますが、19日の定例会では、教科書採択の審議方法についてもお協議をいただきました。本日は採択をしていただくためのご審議をお願いいたしますが、小学校教科用図書採択の候補は各教科11種目で、発行者数の合計は48でございます。その中から1種目ずつ発行者をご決定いただきますよう、お願いをいたします。

簡単ではございますが、ご説明は以上でございます。

樋口委員長 ただいまの説明につきまして、何かご質問はございませんか。

(なし)

樋口委員長 ただいまの説明につきましては、ご了承願います。

次に、審議方法についてでございますが、本日は、8月19日の定例会において協議した審議方法により、教科用図書の採択を行います。

確認の意味で、私から審議方法について説明いたします。

はじめに、小学校教科用図書について審議し、次に特別支援学級教科用図書を審議します。

小学校教科用図書についての審議ですが、審議する教科の順番は、学習指導要領の教科の順番で、一教科ごとに審議・仮決定していきたいと思えます。

まず、各委員には、その教科の採択にあたっての考えなどについて意見交換していただきます。

その後、各委員の考えがまとまった段階で、推薦する教科用図書の発行者について、理由を付して挙げていただきます。

挙げていただく発行者は、一者しかない場合は一者、複数ある場合は二者までとし、優先順位を付けて挙げていただきます。

その際にご留意いただきたいのですが、今回の採択にあたりまして、私たちは、すべての教科用図書の発行者名をあえて伏し、アルファベットに置き換えた状態で各教科用図書の内容を確認し、検討してまいりましたので、意見交換の際も、推薦を挙げていただく際も、A者、B者というように、アルファベットでご発言くださいますようお願いいたします。

次に、推薦を挙げていただく際の発言の順番ですが、教科ごと議席順にご発言いただき、はじめの教科が議席順一番の委員から始めた場合は、次の教科は議席順二番の委員から始めるというように、教科ごとに最初の発言者を変えていく方法を進めたいと思えます。

この進め方でよろしいでしょうか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、審議する教科の順番及び教科用図書の推薦方法並びに発言の順番については、そのように進めさせていただきます。

次に、委員全員から推薦を挙げていただいた後、教育委員会として採択する一者を仮決定し、次の教科へと進めていきます。

なお、一者を仮決定するにあたっては、各委員からの推薦が最も多い発行者を採択する一者として仮決定いたします。

小学校教科用図書の教科ごとの審議が終了し、使用する小学校教科用図書をすべて仮決定した後に、特別支援学級教科用図書の審議を行います。

特別支援学級教科用図書についても審議のうえ、仮決定していただきます。

その後、委員会を休憩とし、休憩中に事務局には仮決定した内容をもとに、議案を用意していただきます。

準備が出来次第、委員会を再開し、作成した議案により、採択の議決を行いたいと思えます。なお、その時まで、各教科用図書の発行者名についてはアルファベット表記のままとなりますので、再開後に議案となった段階で初めて、仮決定した教科用図書の発行者名が判明することとなります。

本日はこのような審議方法で進めて参ります。

それでは、早速審議に入りたいと思えます。

国語

樋口委員長 国語についてご審議願います。

発行者は5者となっています。

各委員からご意見等いただきたいと思えます。

全体のご意見として、国語につきまして何かご意見ありますか。

末廣委員 国語というのは日本文化の基になるものですから、読む、書く、話す、聞くといった基本をしっかりと教えるということが非常に大事ですね。それから、国語から派生する日本文化などにも関連した記述があるものが大事だと思います。そして、分野としてはいろいろとありますが、詩や、あるいは短歌、俳句や、いわゆる漢詩も含めまして、日本文化に関するものが多いものがよろしいかと思えます。

また、昨今の子どもたちは本を読まなくなっていますので、読書というものは楽しいものである、ということがわかるようなものがよろしいかと思えます。

高森委員 やはり今、末廣委員がおっしゃったように、基本・基礎の定着はとても大事だと思います。また、国語に関してはそれに加えて応用力ですね。表現する力がどれだけ養えるか、ということがとても重要なウエイトを占める部分だと思います。

ですから、私はこの国語の教科書を選ぶ一つの基準としては、基礎・基本の定着という部分と、各領域の分量のバランスを比較する際の主な視点として着眼いたしました。どの教科書も基本を押さえる、ポイントを押さえるコーナーが充実していますし、各領域の単元数のバランスもとれてはいるのですが、教科書で使われているテキスト類が、かなりレベルの高い応用力を求めているものもあれば、基本に徹底しているものもありまして、問題はやはり、授業を受ける子どもたちの学力の水準を、どのあたりに設定をするかというのがとても重要だと思います。

そういった意味では、比較的低い水準の児童たちにも視点を定めている教科書は、評価が高いような気がいたします。国語科のねらいの一つである児童の感性を尊重するという点においても、児童個々の個性だとか多様性だとか、感受性の習熟度にも非常に柔軟に対応できるのは、やはり比較的レベルを低く設定している、そういった教材、テキスト類を使っているものではないかと思えました。そのあたりを視点到に検討しました。

垣内委員 ほかの委員の方々とはほぼ同じ意見ですけれども、特に国語の場合は、読解力というのは学習能力の基本にもなるものですし、基盤をつくるものですから、やはり基礎・基本をきちんと押さえるという点は、非常に重要なポイントではないかと思っております。

考え方としては、基礎的な内容をきちんと盛り込んでいるということだけではなく、教える方にとっても比較的教えやすいようなポイントも押さえてあるということも重要なことではないかと考えております。

また、高森委員もおっしゃったように、台東区の事情もございますし、さらには台東区は読書教育に非常に力を入れておりますので、そのような点での配慮がなされているもの。それから、やはり日本文化です。日本文化の基礎・基本でもありますので、そのあたりの

目配りも効いたバランスのとれた教材が一番いいのではないかと考えて、この審査に私は臨みました。

和田教育長 今、各委員からご意見伺いまして、やはり国語の場合には、全教科の基本となるということは間違いのないところをごさしまして、国語だけではなくて、社会、算数、理科など、それぞれの学習の基本であると思っております。そのような意味で、ご意見がございました読解力というのは、まさに最優先すべきものであると思っております。

昨今の子どもたちは、若者も含めてですけれども、コミュニケーション能力が低下しているということをよく言われております。これはただ、近年ですけれども、教育の場においては、自己表現、自分を発表するということについて非常に力を入れておりますので、いわゆるプレゼンテーションについては、かなりの割合で子どもたちは上手になってきていると言えると思います。しかし、それが人間相互間の意思疎通にそのままつながっているかということ、そのあたりは大変危惧するところをごさしまして、お互いに理解をし合うための言語能力という意味での指導が、今後はますます必要になると思っているところをごさします。そのような意味で、言葉を通じて共感を持てるような指導をしていくということが今後必要になってくるだろうと思っております。

また同時に、重要なのは古典文学ですね。皆さんのご指摘のとおりだと私も思っております、ともすると最近はテレビやラジオでも、落語や漫才の番組がほとんどなくなってまいりました。昔は娯楽番組という、そのようなものが主だったのですけれども、日本の文化の中心だった落語、漫才など、大衆演芸の中心があまり聞けなくなってきました。そういう意味でも、子どもたちの古典芸能に関する素養がだんだん少なくなっているような気がいたします。従いまして、今回教科書の中で、歌舞伎や浄瑠璃、能狂言を積極的に取り上げているところがございますので、そのような点は、もっと重視すべきだと思っております。

もう一点は、台東区の新人教員の方たちへの年度当初の挨拶で申し上げた部分ですけれども、やはり言葉のできる、できないというのは、敬語の使い方でもかなり判別できる場所があるのではないかと考えておりまして、敬語を正しく使う力というのがますます求められていくと思います。特に指導の場では、なおさら重要でございまして、対人関係を円滑にする上でも、また日本文化の中での人間関係の良い面を促進する意味でも、敬語を大事に指導できるような教科書ということに重点を置きつつ見させていただいた次第でございます。以上でございます。

樋口委員長 皆さんがご指摘された内容については、私も日々感じておりますが、少し視点を変えまして、現場の視点からお話をさせていただきたいと思っております。

台東区の小学校の学力は、先日の全国学力調査の結果によれば平均以上であることは、間違いのないわけですが、いろいろ話を聞きますと、やはりラクダのこぶ状態にして、できるグループとそうでないグループの間に大きな溝があるということです。この点を、どう解消するかが国語のみならず、全教科において非常に重要な課題ではないかと考えます。

それ故に現場の教員の使いやすい教科書が、その現状を踏まえて、学力の格差是正につながっていくものと考えます。

つきましては、それぞれ各教科用図書の調査研究の研究成果もございまして、現場の教員の使いやすい教科書というものを我々は重視して選択の一考にしなければいけないと考えます。

もう一つ、各委員がおっしゃっています、コミュニケーションの問題は非常に重要でして、小学校時代のコミュニケーション能力の開発というのは、全ての学力の基になると思いますし、それが小学校における国語の勉強の重要なポイントになるかと思えます。

つきましては、基本がよくわかっていて、読書に親しみやすい、活字に親しみやすい教科書を現場で使っていただくということは、とても大切なことであるかと思えます。

私の意見は以上でございます。

そのほかに追加でご発言されたい方がいらっしゃいましたら、お願いします。

和田教育長 最近、学校現場で大変苦慮しておりますのが、インターネットやメールによる伝達の仕方、やり取りされている言動が、いわゆる通常の言動をはるかに超えてしまっていて、インターネットやメールなどの環境の中だけの言動に徐々に移行しつつあって、それが日常の会話の中にもあらわれてきているという状況があるかと思っております、そのあたりも十分意識しながら指導していく必要があるのかなと思えます。

実際、教科書の中で、いわゆる手紙文なども、この後審議する書写にも出てきますが、手紙文での表現の仕方、意思疎通の仕方などについても若干触れているところがあればという期待はしておりますが、そのような意識で考えると、また違う分野かなということで、国語の中で必ずしも教科書にはあらわれていない部分もあるので、十分なところ、不十分なところも、その点が分かれたかなという気がしております。

樋口委員長 その件に関しては、私は総務省の郵政行政の分科会長をやっておりますが、手紙文化を普及努力している日本郵便株式会社の方々の話を聞きますと、小学校6年生で手紙を書けない、宛先、宛名書きを書けない、さらには自分の自宅の住所がわからない子どももいるという深刻な事態もあるようです。そのような意味では、国語教育の重要なポイントは、まず人にあるものを伝えるというときに、型式・形式というのは重要でして、これは小学校からしっかり教えていくものと考えております。よろしいですか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位を付けてご発言願います。

まず、議席番号一番の末廣委員から順にお願いします。国語についての順番は、末廣委員、和田教育長、垣内委員、高森委員、最後に樋口でございます。

末廣委員 国語に関しましては、A者とC者を推薦したいと思えます。

順位は、A者が1位、C者が2位としております。両方ともそれぞれよさがありますけれども、皆さんもおっしゃっていた観点などから、バランスよくできているのではないかと私

は思います。

まず、「漢字の広場」や「ここが大事」というコーナーがあって学びやすい。A者は基本的なものをしっかりマスターさせるという方針が感じられます。教科書で紹介されている本も比較的多いですね。例えば4年では、本の話ではないですが、「言葉が表す感じ」「言葉から受ける感じ」では、「感じ」というのはフィーリングの感じですね。その言葉に興味を持てるような工夫がされています。それから、「話し言葉と書き言葉」、5・6年になりますと「日本の文化を考えよう」「日本語のひびきを味わおう」、あるいは「言葉は時代とともに」「世代による言葉のちがい」などでそれぞれの文化や日本語の響きなどに興味を持てるようになっています。

全体的に古典や漢文、漢詩、古文に関する分野も豊富にあると思います。簡単に言いますと、A者の良さはその点です。

それからC者ですが、それぞれの学年、例えば4年なら「4年生の学習を見わたそう」という全体の提示がありまして、「いつも気をつけよう」や、「続けてみよう」、「言葉のじゅんぴ運動」というコーナーがあります。そして、このC者も日本の文化に対する部分が比較的多いですね。それから春夏秋冬の「きせつの言葉」では、日本独自の季節感を表わす言葉が示されています。「聞いて楽しもう」では、先生が朗読して、それを生徒が聞くというものもあります。それから漢字辞典の使い方や、付録の「学習を広げよう」の中の「たいせつ」のまとめで重要なことがまとめられています。

結論として、私としては甲乙つけがたいのですが、全体的にはA者がよるしいのではないかと考えます。

和田教育長 私も1番はA者を推薦したいと思っております。

A者は、まずは1年から6年まで分冊という点ですね。確かに1冊で1学年分全部というのも一つの方法かなとは思いますが、実際に子どもたちが持ち歩かなければならないということも考えますと、分冊というのは分量の多い国語科としては適切な対応かなと思っております。

それから、中に二段書きのところが結構ありますけれども、非常にすっきりとまとめているので、これは読みやすいなという感じがしております。子どもたちが実際に読む際にも、いわゆる低学年も含めてですが、教科書のページを上から下までというのは、若干つらい部分もありますので、二段書きを適宜活用していて、読みやすくしている配慮は必要だと思っております。

それと、囲みでの記載が少ないですね。ですから、あながち別立てで、いわゆる教科書1ページの中でいろいろな部分を見なければいけないという、そういう煩雑さがあまりないなという気がしております。

古典もいろいろな分野のものが、かなりの分量で入っておりまして、特に漢詩、漢文については、小学生には少し難しいのかなと思いましたが、むしろ漢文というのはどういうものなのか、ということが非常にイメージしやすく記載されていて、読み下し文も含めて

いろいろな段階で読み方を提示してあるのがいいなと思っております。

それから、言葉遣いについての配慮が感じられました。「世代による言葉のちがい」の中で、「言葉カードの例」として、「やっぱし」という言葉について例示されています。要するに世代によって言葉が変わってきているということを挙げておまして、それが非常に印象深いといえますか、そのような配慮が非常に良いと思っております。

総じて、全般的に言いますと、児童作品の数が多いということ。読み物は同世代の子どもたちが十分読めるものをたくさん入れているということ。それから、いわゆる今の子どもたちの言語表現の課題をかなりの確につかんで対応しようとして図っているという面が伺えると思っております。

2番目ですが、実はこれはC者とE者で少し迷ったところでありまして、C者についてはA者と同様のメリットが感じられました。特にC者の場合には、これまで小学校で習ってきたことの統括した事項の整理を非常に上手にしてあるので、むしろ中学校に向けてどう臨んでいくのかという点で配慮があると思っております。

一方でE者ですが、E者で大きくメリットを感じたのは、先ほど末廣委員からも聞いて楽しむというようなお話がありましたけれども、全く同感でありまして、2年生以上に「日本語のしらべ」というコーナーがついていまして、これは谷川俊太郎さんのような人たちの作品を例示として挙げているのですが、非常に日本語の音感的な響きを大切にしている、それを一生懸命に教えたいなという意思が伺えまして、これは非常に重要なことだと思いました。ただ全体で見ますと、今回はE者よりはC者かなと思っております。2番目はC者ということをお願いしたいと思います。

垣内委員 先ほども申しましたように、基礎・基本ということが、まず第一と考えております。また、教材としての使いやすさと、特に読書への誘いという部分も重要なかなと思っております。その観点から第1位はA者、第2位はC者ということにしたいと思います。

まずA者につきましては、先ほどから各委員の方々にいろいろご紹介いただきましたけれども、基本的に基礎・基本をきちんと押さえた上で、誰でもわかるラインアップになっているかなということが一つ。

それからもう一つは、手書きの文字や、いろいろな児童のそれぞれの名前がついた文章が随所にたくさん引用されていまして、それによって自分でも書いてみようという意欲をかきたてるような組み立てになっているのかなと思います。もちろん、ほかの教科書でも同じような試みはありますけれども、特にA者の場合はシステムティックに、系統的にそういう配慮をされているのかなと思いました。

また、教材が非常にバラエティに富んでいました。落語があったり狂言があったり、俳句があったり、説明文があったり、自分で意見文や説明文を作成するというような形で、様々な読解と同時に書く力もつけていこうというような配慮を感じまして、いずれも非常に特色があって、よくできているとは思いますが、A者が一步リードしているということで第1位にいたしました。

C者に関しましては、特に語彙を豊かにするボキャブラリーの観点から、非常に配慮がなされていると思われました。また、A者と同じように重要な部分について説明のコーナーを設けるという教材としての重要な配慮もなされているし、ほかにも読む、書くだけでなく、例えば先ほどご意見がありましたように、通信文などについての配慮もあったということです。A者に比べますと若干手書きの部分とか、児童作品の数が少ないかなということと、それから古典的な日本ならではの表現や、俳句、その他について若干深掘りはされておりますが、多様性という観点からはA者のほうが優位かなということで、第2位はC者ということにしたいと思えます。

C者に関しては、やはり言葉の感性を磨くという観点から、非常に力を入れてらっしゃるということは高く評価したいと思えます。以上です。

高森委員 先ほど申し上げたように、基礎・基本の定着と、それから各領域の配分というところに着眼をしましたが、この5者のうち、A者とC者とE者の3者に絞ることができました。また、教材以外の文献の紹介の点数だとか、それから基本的なポイントを押さえるコーナーの数であるとか、そのようなことも全てこの3者はともに比肩する内容で非常に充実しています。

ただ、先ほど申し上げましたように、児童たちの学力の面からいいますと、C者は全体的に応用力が求められるハイレベルなコンテンツが非常に多くて、私は個人的にはこのC者を導入して、児童たちの国語力を上げたいなという気持ちはありますが、学力の低めの子どもたちのことを無視するわけにはいかないということもありますので、そのような意味では、A者、C者、E者の中では、比較的A者が全体を見通せるような側面があるのではないかと思います。

それから、垣内委員もおっしゃりましたけれども、児童の作品数であるとか、例文の完成形がほかよりもA者は充実しておりますし、全員が取り組めるという内容的な面、それから基礎・基本の定着を図るという面に力点が置かれている点で、A者が若干抜きん出ているのではないかと評価をいたします。

先ほど古文、漢文のことが話題に上げられましたけれども、できれば辞書の使い方のページを、各発行者ともにもう少し充実させてほしかったと思えます。意外と子どもたちは、辞書を手にとって、辞書を引ながら活動するという経験が少ないようでして、ただ最近では子どもたちも辞書に付箋を貼って、その付箋の数を競うようなことで少しずつ辞書に興味を持つようになってきているようではありますが、辞書の活用という点にもう少し力を入れてほしかったと思えます。ただ、そのような意味でも、5者のうち比較的このA者は平均点以上のページ数を確保しているということで、及第点といたしました。

順位としては、A者が1位、それからC者が2位、E者が3位という形で順位づけをいたしました。以上です。

樋口委員長 最後に私ですが、皆さんの意見そのものでありまして、順位としてはA者が1位で、C者が2位でございます。

付け加えることはほとんどありませんが、一つ、教育長が先ほど言及されていた落語の話で、三遊亭円窓さんのコラムがA者にはございました。本区は寄席がある区でございます、また、寄席の発祥地であるとも言われており、まさに台東区での教育から落語を外してはいけないうらうと考えまして、A者がここに言及していることについては、選択については言わずもがなであります。

ほかに教科書として活字の親しみやすさや、読みやすさをいろいろ勉強させてもらいましたけれども、やはりA者が一番わかりやすいという感じを受けました。

一方、C者ですが、本当に学力のある子どもであればC者で勉強させたほうが、学力が伸びていくだろうなという印象を受けました。特に5年生の国語の教材は、相当レベルの高い子どもたちに教える題材だなという感じがします。

ただ先ほど申し上げましたように、台東区の現状であるラクダのこぶ現象をどう解消するかという課題は、現場からも言われている重要な問題でありますので、A者の教科書で、なるべくラクダのこぶを解消する教育をやっていただきたいと思います。従って、A者、C者で1位、2位でお願いしたいと思います。

以上ですが、さらに付け加えることがございましたらどうぞ。

末廣委員 全体的なこと感じたことですが、各教科書の著者について、簡単なプロフィールがついている教科書と、ついていない教科書があります。この文章を書いているのはどのような人か、ということが子どもにわかるようにプロフィールをつけたほうがいいのではないかと考えます。

それから、全体的にどの教科書もそうですが、低学年から古典が結構紹介されていて、これは非常にいい傾向だと思います。ある台東区の小学校では、1年生から漢詩を暗唱させる、覚えたら校長先生のところで発表する、ということをしています。それは意味がわからなくても、小さいころ覚えたものは忘れないというような視点で考えると、その子にとっては一つの財産にもなると思いますので、この傾向はとてもいいことではないかと思ひます。

樋口委員長 今回の視点は非常に重要でして、大学でも教えていることですが、今、一番大きな問題は他人の文章を勝手に持ってくるということがあります。できましたら各教科書、自分で書いた文章なのか、それともどなたかが書いた文章なのかということ、小学校時代からしっかり出処を教えていくべきものでありまして、それを都合よく勝手に取ってきたものを、さあ勉強しましょうというのは、これは今後の著作権の問題ではとんでもないことになりますので、末廣委員が言われたように、やはり教科書・教材だからといって、出処を全く出さないで、ただ文章だけ勉強すればよいというのは、今の著作権重要視の時代においては大きな問題だろうと思ひます。各発行者には、それを考慮していただければありがたいと思ひます。

よろしいですか。

(なし)

樋口委員長 それでは集計します。A者を1位に挙げられた方が5名、C者を2位に挙げた方が5名ということで、仮決定はA者にいたしたいと思います。これにご異議はございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、国語についてはA者に仮決定ということにいたします。

書写

樋口委員長 次に書写についてご審議願います。発行者は6者となっています。

各委員からご意見等いただきたいと思います。書写について何かございませんでしょうか。

高森委員 書写につきましては、やはり発達段階の配慮ということが非常に重要だと思います。子どもたちは筆や鉛筆を使って文字を模写するという活動や経験が少ないかと思っています。特に書道に慣れ親しむ機会が少ない児童には、難しい字を書くよりも、「とめ」「はね」「はらい」といった基本的な部分をしっかりと勉強できるような教材がよろしいのではないかと思います。

また、書道というのは、自分の感性や発想力でどんどんと展開をしていくものですが、まずは小学生ですので、それほど高度な技術を習得するよりも、基礎・基本を定着させたほうがいいのではないかと、そのような印象を持ちました。

垣内委員 私も基礎・基本は非常に重要ではないかと思いましたが、また書写の場合はプラクティスといいますが、実際、字を書いたりするということがありますので、形や姿勢などについて、イラストもいいですが、写真でわかりやすく掲載されていたほうが、より学びやすいのではないかと思います。そのような教科書を高く評価したいと思います。

実際、行動に移すときに、どのようにやったらいいのかという点が、丁寧に解説されているということも重要なことではないかと思いましたが。中身については、当然、基礎・基本である、「とめる」「はねる」といったことについても、きちんと必要不可欠な部分を盛り込んでいるということも重要だと思います。

末廣委員 書写に関しましては、垣内委員からもご意見がありましたが、やはり姿勢や形、あるいは筆の持ち方や鉛筆の持ち方について、はっきりと写真で提示していること。それがまず大事だと思います。

子どもたちが鉛筆などで書いているのを見ると、書写で習っているはずなのになあと思うようなひどい持ち方をしている子がいます。学校で習ったことが一生のものになりますから、一度癖がつくとなかなか直らないということもありますので、基本をまずしっかりと教えるということですね。それから、やはり形ですね。書写では特に形が大事ではないかと思っています。

日本語を書くのに、サインペンで書く場合や鉛筆で書く場合、あるいは筆で書く場合、同じ言葉を書いているけれども、それぞれ書いたものは全く違うものです。そのような日本語の、

ある意味では豊富なものがあるということ、子どもたちにわかってもらいたいと考えます。

ですから、先ほど国語の審議の中でもありましたが、やはり手紙の書き方や、はがきの書き方などについて、しっかり教えることが必要で、そのようなことがフォローできているものがないのではないかと思います。

和田教育長 皆さんのおっしゃるとおりだと思っております、まさに漢字や文字を書くということについて、一番最初の基礎・基本をどのようにして徹底させるか、ということは非常に重要だと思います。今の成人の方でも、ペンの持ち方がユニークな方が非常に増えているということを考えますと、左利きの方などおられますので、それぞれの事情もあるのですが、やはり持ち方についてはきっちりと指導をしていくべきだと思っております。

そのような中で、どのような教科書がいいのかということですが、やはり写真で実際にその姿を見せる、ペンの持ち方も、例えばお箸の持ち方と比べるとか、そのような配慮があるといいのかなということ。何よりも、文字に親しむことがこの書写の第一歩でもございますので、年齢に応じた指導がきっちりとできるかどうかということについても、今回は十分吟味をさせていただいたつもりでございます。

それと同時に、この書写の中には手紙の書き方や、1年生から年賀状を書かせたりするものがある、非常に貴重な日本文化でもありますので、そのようなことも指導しているかどうかを見させていただきました。

樋口委員長 私も教育長の意見と同じで、物を書くというのは二つのポイントがありまして、文字を丁寧に書くということと、どういう型式で書くのかということ。手紙で書くのか、それとも普通の短冊に書くのか、ということを含めて、原稿用紙の書き方も含めませんが、その二つのポイントに配慮した教科書がよろしいかと考えます。

その一方で、きれいな文字を子どもに見せる必要もあって、そのような意味では写真できれいな文字を教えている、示している教科書というのは、やはり優先されるべきものと考えます。

そのほかに追加するご意見はありますか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採決すべき発行者について順位をつけてご発言をお願いします。今度は議席番号2番の和田教育長から順にお願いいたします。

和田教育長 この書写につきましては、A者を1位に推薦をしたいと思います。

理由ですが、手紙の書き方が項目としてきっちりと入っているということ。ほかの発行者でもありますけれども、まずはそれが条件だろうと思えます。

それから、1年生の鉛筆の持ち方について写真を非常に多用しているということ。日常的に箸をどうやって持っているかということと比較をしながら指導をしているということが非常に良かったと思っております。

それと、これは配慮し過ぎではないかという面もあるのですが、1年生、2年生には「できたよシール」というのがついていまして、もう幼稚園・保育園ではないのだから、そのようなものを意識してはいけないとは言いますけれども、子どもたちにとっては非常に励みになるのかなと思っております。

また、筆や墨、あるいは鉛筆など、そのような道具の製作手順、どのように製作されているのかということも、この中にコラム的ではありますが入っております、一方では非常に興味深い部分も出てくる。自分たちが日常的に使う筆記道具についても関心、または造詣も深まるということで、A者が私は1番かなと思っております。

2番目ですけれども、2番目についてはB者とE者で多少迷いましたが、B者も総じて1年生に対する配慮が伺えますので、文字に取り組むということの第一歩としては非常に丁寧な内容だと思えました。その大きな例としては、最初に書く言葉に、自分の名前を挙げています。ほかの発行者では、非常に一般的な果物の名前や乗り物の名前なのですが、このB者の場合には自分の名前をまず、ひらがなで書くことを指導しているということ。そのような意味でも、低学年の文字に対する取り組みを非常に促進していると思っております。

一方、E者ですが、年賀状の書き方を1年生から指導していることや、毎年のように1年生から5年生まではがきの書き方を指導しているということ。同時に、筆の指導においては、小筆の洗い方を指導していました。これはE者だけでした。いわゆる小筆の洗い方のポイントは、根本までは洗わないということですね。そのようなところは、非常に細かいところまで行き届いた配慮をしているなと思っております。

B者とE者に差がなくて、順位づけが難しい部分もありましたが、2位はB者ということをお願いしたいと思えます。

垣内委員 書写の場合は、基礎・基本のうちの一つが実践というか、プラクティスだと思っておりますので、その点について配慮があったところに絞りまして、その中で優先順位をつけました。基本的にA者が1位、B者が2位ということにしたいと思えます。

A者に関しましては、やはり写真が多用されていて、筆の持ち方であるとか、使い方といったようなものがそれぞれ写真で非常にわかりやすく、一目見るだけでわかるという点を高く評価したいと思います。また、このA者の場合は多様な場面での書き方、ということにも配慮されているように思いました。多様な場面というのは、例えば封筒やはがきという、一般的な原稿用紙に書くということ以外の場面も想定されていますし、また、普通に椅子に座って書くということだけではなくて、オープンスペースでどうやって書くかといったようなことまで配慮されているという意味で、非常に実践的ではないかと考えました。また、教材についても非常に基礎的なものがバランスよく配置されているということで、あまり難しいものもないですし、わかりやすく良いというのがA者の選定理由です。

2番目のところについては、私はB者とF者で悩みましたが、B者に関しては、やはり写真が多用されているということ。それから手書きやはがき、作文、その他、例示がなされていること。また、発展的な内容がきちんと盛り込まれているということがありまして、第2

位はB者にしたいと思っております。

高森委員 私も他の委員の方々と同意見ですけれども、先ほど言ったように、発達段階の配慮というところで、まずA者とB者に絞りました。2者とも一長一短ありますが、比較的B者は教材の中に発展的な内容が入っていて、反対にA者は基礎的な内容のものが多くという面があるかと思えます。その比重で考えると、日ごろ書道に親しむ機会の少ない子どもたちにとっては、基礎的な内容の多いA者が適していると思えました。年間の授業時間数も非常に少ないですので、そのような意味では、あまり発展的な内容が含まれているものは、とっつきにくい部分もあるのではないかと、指導する側としても、なかなか難しい面があるのではないかと思えました。

私の子どもの頃はどうか覚えておりませんが、最近の教科書は非常にビジュアル面が充実していて、特に写真やイラストを使って筆の持ち方や鉛筆の持ち方など表現しています。恐らく昔であれば、先生が一人で持ち方を指導したり、子どもたちに見せたりしていたと思いますが、そのような意味では、子どもたちは手元で実際に写真を見ながら筆の持ち方や鉛筆の持ち方を学べるという意味では、イラストもいいですが、写真が多用されているもののほうが、子どもたちが直感的にわかりやすいと思えますので、A者を第一候補、B者を第二候補にしたいと思えます。

なお、両者ともに魅力的なのは、原稿用紙の書き方や、手紙やはがき、作文の書き方や封筒の書き方ということが組み込まれているというところが、ほかの3者、4者と比べますと、非常に秀逸ではないかなと、そのように感じました。

樋口委員長 皆さんと同じように、1位をA者、2位をB者にしたいと思えます。

理由は先ほど申し上げましたように、原稿用紙及び封筒の書き方等々、文字を書くことプラス、何に書くかということについての言及がなされていて、子どもたちにこの文字をどこにどういう形で書くのか、ということの教育に配慮されているのがA者の教科書であると考えます。

A者とB者の違いですが、B者は6年生の巻末に手紙の書き方を提示していますが、少し遅いかなと思えます。A者のように4年生頃から教えていくべきものと考えまして、順位はこのようにいたしました。

先ほど高森委員が言われたように、毛筆で文字を書く機会はなかなかありませんから、子どもたちも、各家庭において毛筆で何かをする機会は少ないかと思えます。ただやはり、我々の文化である書道のあり方については、しっかり教えなければいけないと思えます。文字をしっかり教えるということについて、どういう形で子どもたちに教えるのかという教えやすさから言えば、私はA者を第1位に薦めたいと考えます。

末廣委員 私は皆さんと違いまして、B者を1位、A者を2位としました。

まずB者ですが、これは考え方の違いだと思いますが、毛筆というのは普段の生活であまり使わないわけですが、割と毛筆を大切にしているということが挙げられます。全体的なイメージとしては各学年ですね、いわゆる毛筆の手本が非常に多い。また、A者とB者も同

じですが、筆の持ち方、あるいは姿勢が写真で非常にわかりやすい。特にB者は、筆を持つ全体の姿勢、いわゆる小筆と大筆と、それから鉛筆との違いですね。そのときの姿勢の違いが写っていますので、筆の持ち方の違いだけでなく、それぞれ姿勢も違うということがわかりやすいと思います。また、手紙の書き方、はがきやエアメール、原稿用紙、あるいはノートの書き方が詳しいのではないかと思います。

A者は、いろいろなケースにおいて手書き文字で書こう、伝えようということで、例えば5年では、社会科見学や委員会活動、6年では修学旅行や学習発表会について、それぞれ2ページくらいだと思いますが、それを手書きでどう書くかという具体的なケースが出ておりました、これは非常によかったかなと思います。全体的には私はB者を1位、A者を2位にしました。

樋口委員長 さらにご意見として追加されることはございますか。

(なし)

樋口委員長 集計結果ですが、A者を1位に挙げられた方が4名、B者を挙げられた方が1名。2位にA者を挙げられた方が1名、B者を挙げられた方が4名ということで、書写についてはA者に仮決定ということで決めたいと思いますが、よろしいですか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、書写につきましてはA者に仮決定ということでお願いいたします。

社会

樋口委員長 次に、社会についてご審議願います。発行者は4者となっております。各委員からご意見等いただきたいと思っております。

垣内委員 社会科も同じく基礎・基本をきちんと押さえているというのは、大前提だと思っておりますが、一方で子どもたちが将来の一員として担っていくべき社会の導入口にもなっているという、非常に重要な科目であると思しましたので、その流れがスムーズに世の中への興味・関心に行くように構成されているかということと、それから子どもたちの意欲を十分に、参画意欲というのでしょうか、喚起するような構成になっているかということを中心に見ていきたいと思っております。

また一方で、社会は対象とする内容が幅広いものですから、教える側にも使いやすいような資料がたくさん入っている、情報が十分含まれていて、その中からそれぞれの地域性、それから子どもたちの状況にあわせて選択できるような形になっているということも望ましいのではないかと考えております。

もちろん、その問題解決型の学習展開ということも非常に重要なポイントだとは思いますが、それ以前に基礎・基本とそこに至るまでの参画意欲ということを重視したいと考えて、審査に臨みました。

和田教育長 残念ながら、台東区では中学校1年生の社会科の成績というのは、全国平均より若干低い状況であります。そのような意味では、小学校での社会科教育の重要性につ

いては考えておりました、真剣にもっともっとやっていかなければいけないという気がしております。

そもそも社会科については、今の世の中がどのようなになっているのかということをお学ばせたいと思います。端的に言うと、そういうことだと思っておりました、そのための材料をどうやって子どもたちに提供していくのか。台東区はそもそも歴史と文化に非常に恵まれた区であるということをお標榜しておりますけれども、台東区という地域に、まず生まれ育ったことを誇りに思えるような教育の土台として、社会科教育をしっかりとやっていかなければと思っているところでございます。

個別のいろいろな事象について細かく知ることが大事ですけれども、基本的には歴史や地理、そのほか社会の流れを大きな流れとして、しっかりとつかめるようにということを中心に、教科書はどのように組み立てられているかを見させていただきました。

とりわけ、今の時代においては、社会科の中でメディア教育が非常に重要な位置を占めていくことになると思っておりました、5年・6年でメディア教育にも触れておりますけれども、やはりこれだけ情報化が進んでいる中で、子どもたちが自分の生活とメディアとの関係がどうなっているのか、ということもきちんと教えられるような教科書、読んだだけでも理解できるような教科書を選びたいと思っております。

さらに台東区について申し上げますと、オリンピック・パラリンピックに向けて、世の中がグローバル化をしているということをお前提として、子どもたちも世界に目を向けられるような、そういうわくわくするような記述をしてくれるようなものがあればなという視点でも選ばせていただいたところでございます。

高森委員 今、和田教育長からも冒頭にお話がありましたけれども、確かに台東区の小学校、中学校の学力の比較をしますと、中学に入ると少し社会科の学力が低くなるという現状があるかと思っております。実は、私も人文科学系の大学で講義をしておりますと、子どもたちが基本的な知識をほとんど持ってないと感じることがあります。それはなぜかと思ったときに、今回、11教科の比較をしていく中で、やはり一番捉えどころのない科目が社会科だと思っております。

国語や数学や理科は、ある程度答えが固まっています。動くことはないのです。しかし、社会科は生きているのです。地理にしても歴史にしても、常に新しいものが出てきますから、そのような意味では非常に捉えどころがない。以前、習っていたことが、新しい発見があって内容が変わることもあるし、社会情勢が変わって、どんどん変化することもありますから、子どもたちもあまり身を入れて学んでも仕方がないかな、というような印象を持っているのではないかという気もしました。

そうした意味では、社会科は生きた教材ですから、勉強をしていくのはすごく難しい部分が多いのではと思っております。そのような中でも、あまり発展的なことをやるよりは、やはり垣内委員がおっしゃったように基礎・基本の定着というのはとても重要で、そのあたりを見ていく必要があると思っております。

それから、生きた教材ですから、次々と新しいものが入ってきますので、それに追いついていかなければいけません。ですから、情報を応用する力も必要ではないかと思います。そのような意味で、私は、この二つの部分に視点をおいて4者を比較してみました。

末廣委員 社会というのは本当に分野が広いと言いますが、歴史、地理、公民といった分野が全て入っているということで、子どもたちが習うものがたくさんあるということです。ですから、やはり基本的なところをしっかりと教える、ということが大事だと思います。

それから、特に5年・6年の社会を学んで、これからの日本や世界がどうあるべきかというようなことまで子どもたちが考えられるような、そのような視点があるといいのではないかと思います。中学、高校になりますと、社会はとかく暗記物になってしまう傾向があり、子どもたちにとって、社会はつまらない、ということに結果的にはなってしまうと思います。ですから、小学校時代から社会というのはとてもおもしろい科目だと、非常にダイナミックな教科だということがわかると良いのではないかと思います。そのような観点で考えました。

樋口委員長 大学で学生を見ておりますと、自分と社会との関わりについて、ほとんど意識しないで勉強してきている学生が多いことは、全く否めないところでありまして、今、高森委員からも、そのような話がありました。

やはり、自分と社会との関わり合いをよく理解させなければ、興味を持つはずもなく、自分はこの社会の中において、どう社会のシステムを理解して、そこで問題があったらどうしたらいいのか、ということがふまえてある教科書というのは非常に重要だと思います。その観点で教科書4者を比較して選択をいたしました。

ほかに追加することがございましたら、ご意見、どうぞ。よろしいでしょうか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位を付けてご発言願います。

今回は、議席番号三番の垣内委員から順にお願いします。

垣内委員 先ほども申しましたように、基礎・基本ということと、それから導入部として子どもたちが興味を持って社会科に参画しやすいかどうか、という観点から判断いたしました。1位がB者、2位がC者です。

それぞれの発行者が大変工夫をされているというのは、読んでいて感じましたが、特にB者の場合は、写真も非常に豊富で、社会というのは一般的な総論としての社会ではなく、それぞれ身近な人たちがつくっていくという世の中の仕組みが、この教科書を見ているだけでもわかってくるようなつくりになっているところを高く評価したいと思います。

また、最初に学習の進め方が提示されていて、「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」というような一つの流れを示しているという点も、ほかの教科書も同じようなつくり方になっていますが、よりクリアな形で伝わるので、教える先生も、わかりやすく教えられるのではないかと思います。

また、もう一つのポイントは、資料がたくさんあることですね。全てをやる必要はないと思いますが、地域性や、あるいは子どもたちの興味関心にあわせてピックアップができるような選択肢を多様に用意されているというのは、ほかの教科とは違って、この社会科においては重要なポイントだと思います。世の中はとても多様化していますから、全てを使うということはもちろんないわけで、ただ、選択肢が多様に用意されているということは重要なポイントだと思いました。また、構成に関しても非常にバランスよく取り上げているという点も、評価させていただきました。各者とも社会科については、甲乙つけがたく、工夫されている感じがいたしましたが、第1位はB者。

また、B者の場合は、例えばはっきりと仙台市についてご紹介をされていますが、逆にそうすることによって、より具体的にイメージがつかめるということもありますし、仙台市を仮に台東区に置き換えたときに、どのように情報が置き換わっていくのかという勉強もできますし、いろいろな使い方ができるのではないかと思いますので、B者といたしました。

C者に関しましては、非常に流れがうまく提示されておりまして、また手書きでカッコに埋めていくという工夫もなされていて、ある意味自分で調べていくということもできるのかなという点もありましたし、内容も非常にバランスが取れておりましたし、関係者のインタビューと写真も提示されていて、たいへん悩みましたが、先ほども言いましたように、よりクリアに導入の役割を果たせるのはB者だと思いましたので、第1位はB者、第2位はC者ということになりました。

高森委員 私も基礎・基本の定着といった部分に着眼をして比較しまして、私の場合はB者とD者に絞りました。

併せて、学習の見通し、調べ、まとめ、活用、そして深めていくといった過程を重視している、問題解決型学習の面という部分にも着目しました。これは、4者のいずれにも取り入れられていますが、B者については、ほぼ全ての要素において平均点以上を占めているのではないかと思います。また、同時にバランスも均衡がとれているのではないかと思います。

また、D者については、解決すべき点を明白にする学習問題の数の多さは、少し魅力的な部分もありますし、構成や分量の面においてもB者に肉薄しています。それから、関係者のインタビューの欄の活用、学習のヒントとなる吹き出しの数も非常に多用されていて、児童の学習意欲をかきたてる工夫が随所に盛り込まれている点も両者の特色ではないかと思えます。

ただ、B者について、私が非常に魅力的に感じたのは、地域や国家の発展に貢献した先人を紹介した箇所や、地震大国・災害大国である日本、そして唯一の戦争被爆国である日本ならではの災害に関する項目、そして平和の希求に関する項目の数が他社よりも卓抜している点が評価されます。特に、先ほど樋口委員長から、子どもたちが自分と社会との関わりが希薄でよくわかってない子どもたちが多く、というご意見がございましたが、社会と

の関わりと同時に、歴史との関わりも、私たちはとても重要だと思うのです。人間というのは常に歴史的に生きる存在だ、という視点から特にこのB者の場合は、6年生の上巻の部分で、歴史学習を振り返って、歴史を学ぶことの意義について考えるチャプターが意図的に設けられている点は高く評価したいと思います。

よってB者を第一候補、D者は第二候補に推薦いたします。

樋口委員長 結論から言えば、B者が1位、C者が2位であります。

経済学を教えていると先ほど申し上げましたが、特に国際経済学を大学で教えておりますので、その観点からネガティブな話をしますと、日本とつながりの深い国を4カ国取り上げていることに、私は抵抗がありまして、例えば世界の中の日本を見れば、4カ国だけでは済まない話でして、どのような観点から読むかでいろいろなつながり方がございます。

中国、アメリカ合衆国、ブラジル、サウジアラビア、一方では、韓国、中国、アメリカ、ブラジルというように、どこに視点を置いてつながりをつくるのか、例えば移民についてであればブラジルとの関係がございまして、経済の関係では中国、韓国、アメリカとの関係がございまして、もっとほかの観点ではいろいろなスタイルの国との関係がございまして、これをこのまま特に4カ国とつながりが深いですよと教科書で紹介した場合に、子どもから「どうして」と言われたら、おそらく教員が困るのではないかと思います。

それぞれの子どもたちが、それぞれの視点で、例えば経済の観点で見るとか、政治の観点で見るとか、人々の交流の面で見るとか、言葉のつながりの面で見るとか、そういうのを見てそれぞれの国とのつながりや、社会のつながりを見ることを後学のテーマにしてあげばいいわけですし、どうも地域性のところで無理がある記述が教科書で見られるのが、私においては残念なところがございます。

一方でB者は、そのあたりをうまく開示しながらバランスをとった記述で、地域の問題、資源の問題、環境の問題、世界平和の問題について、子どもたちに社会の関心を持たせる意味ではいい教科書ではないかと考えます。

C者ですが、先ほど言いましたように、国を挙げているのは残念だと思いますが、ほかの教科書に比べれば、バランスがとれていましたので、C者が2番目に挙げられるかなと思ひまして、B者が1位、C者が2位ということでお願いしたいと思います。

末廣委員 私もB者が第1位です。C者が第2位です。

今、樋口委員長からもご意見がありましたが、私もその観点で見えていまして、日米、日中、日韓と、この関係のことが多くて、それからサウジアラビア、あるいはブラジルなど、選ばれる国は、みんな同じようですね。B者は、EUやトルコなども入ってきて、他と比べれば広いかなと思います。全体的に、やはりヨーロッパの記述が少ないですね。日本に近い国との関係、あるいはサウジアラビアというのはイスラム国の代表国として選ばれているのか、あるいは石油の関係で選ばれているのかよくわかりませんが、多少偏っている紹介だなと感じました。

そのような点では、比較的B者がいいのではないかと思います。

また、社会的な問題になっている子育て支援や、震災復興、あるいは憲法問題や、戦争の問題、自然災害などについて、バランスよく記述があるのではないかと思います。

また、ユニークだったのは、これからの食糧生産、あるいは領土問題ですね。それから、情報に関するページ数が非常に多い、52ページも使っているということで、非常にバランスが良いとともに、問題とされるものを取り上げているという点で一番よかったと思います。

それから2位はC者ですが、B者に比べるとバランスはいいのですが、全体的にあまり特徴がないと感じました。したがって、B者を1位にいたしました。

和田教育長 私も1番はB者です。

その理由ですが、まず資料が非常に多いと思います。社会科の場合には、教科書の記述も大事ですけれども、基本的には何に基づいての記述なのか、ということを示していかなければならないだろうと思っています。子どもたちにも、そもそもの資料がこうなっていて、これを解釈するところになりますよというようなことが、わかりやすく、理に適った説明ができていう意味で、B者は非常にいいと思っています。

個別の部分を取り上げますと、工業生産の部分で日本各地の工業生産の特徴をかなり詳細に示してしまっていて、いわゆるものづくりの視点を非常に大切にしていると思います。ともすると、ものづくりについて忘れられがちですが、地方でこれだけ頑張っているんだということ、よく知ってもらいたいという意味では良いと思います。

また、偉人の話について先ほどご意見がありました、それぞれの郷土でいろいろな人が郷土の振興のために尽くしている。こころざし教育を台東区は行っていますが、それを触発する意味でも、これは非常にいい例だなと思っています。お恥ずかしいのですが、私が知らない人の名前も出てしまっていて、私も勉強になったところがございます。

それから、第二次世界大戦中の記述の中で、生活部門、いわゆる一般の国民がどのような生活をしてたのかという記述が丁寧にしてあると思いました。戦争がどう進んでいったのかということもありますけれども、やはり国民がどのような苦労をしていたのかということを知ってもらう意味では、非常にいい資料だなと思いました。

それから、もう一つ申し上げますと、先ほども触れましたが、情報化の部門でございます。このことについては、5年生で触れていますが、非常に分量が多くて、内容も充実していると思います。どうしてこんなに分量が多いのというご意見があるかどうかわかりませんが、私は非常に重要なポイントだと思っています、そういう意味でも、B者は良いと思いました。

2番目ですが、C者とD者で迷いました。D者は非常に見やすいページが多いですね。文字が大きくて、同時にゴシックでキーワードを表示してあります。これは私たちが子どものころに使っていた教科書もみんなそうでしたが、昔ながらのいいやり方を上手に使っていて、非常にシンプルで読みやすいなと思いました。子どもたちにはいいだろうと思いました。

また、工業関係については、もう少し載せてくれるといいかなと思いましたが、残念ながら一部にしか載っていなかったのもので、それで1位には推しませんでした。

D者ともう一つC者もいいなと思いましたが。2番目はC者で推薦をしたいと思いますが、C者については、いい点は先ほども申し上げました人々の暮らしについての記述が非常に多いというところがよかったです。これは各時代の記述が非常によくできていると思っています。ただ、情報化、あるいはそのほかの部分で多少足りないなというところが残念だったなと思っています。

そういう意味で、C者については2番目で推したいと思しますので、お願いいたします。

樋口委員長 各委員の推薦の表明プラスご意見について、さらに付け加えたいことはございますか。

樋口委員長 この間、スイスに行って感じましたのは、日本人がマッターホルン及びアイガー北壁のルート開拓に大変な貢献をしているということが、私は行く前からわかっていたのですが、スイスでは、その日本人の貢献に関して、大変評価が高くて、10日間ぐらいあちこちの山を歩きましたが、何とハイキングコースの案内板の6カ国の中に、日本語でルートの説明、花の説明など、全部出ているのです。驚くことに、大正時代から日本人はアイガーの一般ルート開拓に、榎有恒さんという方が来ていたそうです。グローバル化社会における日本人については、小学生にぜひとも紹介していただければありがたいなという感じはいたしました。

オーストリアにおいても、小澤征爾さん含めて相当日本人が音楽の世界で活躍しておりまして、こういうことをもう少し表に出してくれたらいいなと思えます。世界で何かをやってやろうという小学生が出てくるのではないかと思います。教科書発行者の方をお願いしたいと考えています。

よろしいでしょうか。

(なし)

樋口委員長 集計いたします。B者を第1位にされた方が5名、第2位にC者を挙げられた方が4名、E者を挙げられた方は1名でありまして、B者を社会における使用教科書に仮決定いたしたいと思えます。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、仮決定をさせていただきます。

地図

樋口委員長 次に、地図の審議をお願いします。発行者は2者となっております。各委員からご意見をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

和田教育長 地図については、私たちが子どものころ、世界地図や地球儀を見て、まだ見ぬ異国の街や人々の生活を想像したものです。そのような意味で言いますと、今は一気に世界が縮まってしまひまして、テレビや様々なメディアを通じて世界を見られますので、

急に世界が身近になったという感じがいたします。

ただ依然として世界地図というのは、社会科だけではなくて、日常生活の中で非常に重要な学習材料でもありますので、子どもたちの将来に対する希望や、憧れを刺激する意味でも非常に重要なメッセージだと思えます。ですから、少しでも見やすく、興味が持てるようなものであってもらいたいなと思っております。

垣内委員 私は、見やすいということも大事だと思いますが、小学4年、5年、6年と3年間使用するということもありまして、相当発達段階も進んでいく中で使っていくものですから、情報量が豊富だということも重要なポイントだと思っております。ですから、さまざまな角度から地理を見ていくという見方も含めて、記載されているものを推薦したいと思っております。

末廣委員 私も同じような意見ですが、やはり地図や関係の情報、資料については、多いほうが様々なことが学べるのではないかと思います。見やすいということも指標ではあると思いますが、この地図帳に盛られた情報がどの程度あるのか、その観点で選びました。

高森委員 私はこの地図に関しては、あくまでもツールとして有効に活用できるかどうかというところに着眼しました。今、情報量の話が出ましたけれども、この薄さで情報を充実させるのはとても難しいと思います。むしろ、これを引き出しにして、例えばこの部分を調べたいというときに、ほかのツールを使って、インターネットや分厚い地図、あるいは歴史地図など、そのようなものに辿りつけるような構成になっているほうがいいと思いました。昔ながらの地形の名前が載っているだけの地図と、さまざまな情報が盛り込まれた地図とを比較したときに、やはりただの地図というよりも引き出しがたくさんある地図が魅力的ではないかと思いました。

もう一つは見やすさです。文字が凝縮しているものと、文字数はそれほど多くないけれども、見やすくわかりやすい地図というのを、ツールという面では重視しました。

樋口委員長 私も、日常、身近に置いておいて、何かあったら調べる、見るというのは、とても重要なことだと思います。台東区において仲見世に1時間立っていればいろいろな国の人たちが来ておりまして、二天門のところのお土産物屋さんの説明書きの第一位がタイ語で表記されています。相当多国籍化した来客があるわけですし、それに対してすぐ読むことができる、見ることができるという意味での地図帳というのはとても重要かと思えます。そのような点で私は選びました。

それ以外に何かご意見ございますか。

(なし)

樋口委員長 それでは、議席順で高森委員からお願いします。

高森委員 先ほど申しましたように、ツールとして見やすさを重視して2者を比較しましたが、利便性や情報量もそうですが、総合的に判断をして、ユニバーサルデザインを使用したA者が非常に魅力的だと思いました。B者は確かに、昔ながらのつくりで、なじみの深さではB者のほうがありますがけれども、子どもたちが手にとったときに、また児童の視点に

立ったときに、A者の新しいデザイン、版が少し大きいことというのは、非常に子どもたちの興味を引く、見ていて楽しいと思える地図帳になっていると思います。そのような面が一つです。

それから、やはり一番神経質になっているのは、領土問題の部分ですけれども、この領土問題に関する記述も、その原因が、例えば天然資源の開発などの利権等にあることについても言及していることや、あるいは関係国と協議中であるという表現になっていることなど、問題の所在を明らかにして児童たちに考えさせる内容になっているという点では、A者が評価できるのではないかと思います。

よって第一候補をA者、第二候補をB者といたしたいと思います。

樋口委員長 私はA者を1位、B者を2位にします。

B者のほうは大変残念なのですが、若干情報が古いという感じがしまして、特に「カレーを食べるインドの家族」とありますが、あれはインドの煮込み料理が全部カレーであって、日本人のカレーと全然違うということなのですね。

それから、この地図帳の使い勝手の問題についてですが、B者は中国の地名の半数をカタカナのみで標記していて漢字の標記がありません。実用性が全くないカタカナだけで地名を標記しているのですね。その一方で、A者はきちんとカタカナの下に漢字を標記している。この地図帳というのは、中学にもつながっていく地図帳の利用の出発点になるわけですから、B者の地図帳については、私個人としてはたいへん残念に思い、この順位をつけました。

末廣委員 私は、B者を1位、A者を2位としました。

A者ですが、確かにA4版ということで、大型で非常に見やすいですね。そこが大きな利点であると思います。ただ、B者を選んだのは、いろいろな地図があることで、例えば鳥瞰図や絵地図、土地利用図や用途別の地図など、いろいろな情報が入っているということです。また、巻末の資料も情報量が多くて良いと思いました。

それから、東京に関しましては、折り込みで、3ページ分の鳥瞰図があります。その前のページには東京都の中心部があって、隣には江戸時代末の東京の地図が載っています。台東区の子どもにとっては参考になることが多いのではないかとということで、全体的に見て私はB者がいいと思いました。

和田教育長 私は、A者のほうがいいと思います。

まず版の大きさがA4であるということ。評価は分かれるかと思いますが、大きいことによって資料の数、あるいは記載内容も若干多い気がしております。巻末の索引の地名の数が違いますので。同時に、索引の文字もA者のほうが見やすいですね。これは世界的な地名などを探す際に、索引が利用できるのは、子どもたちにとっても非常に有力な力になりますので、これは大事にしたいなと思います。

また、大きいということでのメリットだとは思いますが、例えば中部地方、愛知県のあたりの都市部の情報なども出ていますが、同じ50分の1で両者とも表示されていますが、表示項目はA者のほうが多いですね。これはほかの部分でも言えまして、やはり版の大きさが

かなり内容の充実に影響しているのではないかと考えております。

また、その他には、京都の中心部など、まちの特徴や、あるいは寺社の配置などが非常にわかりやすく載っておりまして、歴史の教科書などにも十分対応できると思えました。それから、東京についてですが、私たちが住んでいる東京でも、地域の特徴的な施設や、鉄道、全体的な地形などが非常にわかりやすく載っておりまして、東京人であっても、東京の地形については、あまり関心を持たないものですが、子どもたちにとっては非常にいい資料になると思っております。また、統計の中にオリンピックやサッカーワールドカップの開催国の記載なども入っておりまして、そのあたりも楽しいと思えました。

一方、B者ですが、先ほどお話があった鳥瞰図、バードビュー図は、非常に興味深いですね。これはもっともっといろいろな場面で活用できるといいなと思えました。また、東京については江戸時代と現在との地形の相違ですね。埋め立てが現在も大分進んでいますが、今の東京が江戸時代の東京と同じではなかったのだということを非常にわかりやすく示していますので、これは大変いいなと思っております。

それからもう一つは、日本地図全体の資料の中で、歴史の事象と一体化したページがありました。これも魅力的でしたが、全体的な評価でいうと大きさのメリットを活かしているA者のほうかなということで、A者でお願いをしたいなと思えます。

垣内委員 結論から言うと、私はB者です。非常に悩ましい部分がありまして、それぞれ特色が違いますし、強みも違う。

A者はとてもビジュアルで、おもしろくて興味を引く部分はあるのですが、一応テキストということですので、きちんとした情報量が盛り込まれていること、いろいろなアプローチができること、さまざまな情報が入っているものを、私は高く評価したいと思います。

その点、このB者に関しましては、先ほどご意見がありました。地理を平面的に見るのではなくて、立体的に断面であったり、上からバードビューで見てみたり、それから私たちの地球ということで、どこから見るとどのように見えるのかなど、様々な角度から知識が深められるという観点で評価できると思えます。

本当に悩みましたが、資料的な価値ということに着目して、私はB者を推薦したいと思います。

樋口委員長 かなり拮抗していますが、追加してご意見ございますでしょうか。これで集計してよろしいですか。

(なし)

樋口委員長 集計しますと、1位にA者を挙げた方が3名、B者を挙げられた方が2名、2位にA者を挙げられた方が1名、B者を挙げられた方が2名ということで、A者に仮決定いたしたいと思えますが、ご異議ございませんか。

垣内委員 一つだけ言うと、このB者も世界地図の中の中国のところですが、カタカナだけではなくて漢字が入っている都市もあります。

樋口委員長 そうですね。ただ、都市の中の半分しか入っていません。例えば、桂林や

貴陽、包頭については、カタカナしか入っていません。入れるのであれば、きちんと漢字を入れたほうが良いと思います。カタカナというのは、日本でつくった文字で、共通語ではありませんので、ぜひとももう少し漢字を使ったほうが良いと思います。よろしいですか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、地図に関しましては、A者に仮決定ということでお願いいたします。

樋口委員長 それではここで、昼休みにさせていただきたいと思います。再開は午後1時からということにいたしますので、傍聴の方はよろしくをお願いいたします。

それでは、一時休憩になります。よろしくをお願いいたします。

(休憩 12:00~13:00)

算数

樋口委員長 それでは、午後の部を始めます。

算数についてご審議をお願いします。発行者は6者です。各委員からご意見をお聞きしたいと思います。

和田教育長 算数でございますが、比較的、台東区の場合には一生懸命指導ができていくという結果が出ていますけれども、それにしましても、基本的には算数はいろいろな学科に共通するものでもありますし、その單元ごとに学んだことをしっかりと体得しておかないと、次に進めないという特性があると思っております。そういう意味では、積み重ねをしっかりとできるような体制をとっておくということです。

もう一つは、反復練習について、各教科書がどの程度重点を置いているかということにも注意をしなければならないと思っております。とりわけ、新1年生には大変重要な科目であり、今は就学前の教育が充実している面もありまして、幼稚園や保育園、あるいはその他の幼児教室などを通じて、ある程度数字というものには子どもたちはなじみを持っていると思っておりますけれども、小学校においては、それらはもちろん前提とせざるを得ませんが、数字や計算の概念を、改めてしっかりと基礎から指導するということが必要だと思っております。そういう面で、基礎・基本の部分をどれだけ重点を置いてわかりやすく時間をかけられるかということが大切です。

もう一つは、これは習熟度の早い遅いというのが、かなりはっきりと出る科目でもあると思いますので、やはり先ほど委員長が触れられました、2こぶラクダ、3こぶラクダなどのことも踏まえたうえで、いわゆる二つ目や三つ目のコブの子どもたちにも十分学習をしっかりとできるような教科書づくりでなければならぬだろうと思っております。

もう一つ申し上げますと、中学校になりますと、まさに算数が数学に変わるわけでありまして、そのための基礎を小学校6年生までの間に、どうやって築くかということ、高学

年においては十分注視する必要があると思っていますところでございます。

以上であります。

垣内委員 私も、算数の場合は単に数字を計算するというだけでなく、数学的な考え方、物の見方のようなところにも通ずるところがありますので、やはり基礎的な概念、それから基礎・基本をしっかり身につけられるということを第一の観点として考えております。また、あわせて日常生活や他の教科との関連づけということにも配慮した部分にも着目しました。

もう一つは、内容が割と抽象的な図形であったり、数的な処理であったりということがありますので、プレゼンテーションといいますか、その構成自体がシンプルで見やすく丁寧というところにも配慮いたしました。また、自分で問題を解ける、また、そのための練習問題が多いというところも着目した点になります。

ただ項目が多だけで、あまりに情報過多になる場合には、この算数の場合は、他の教科とは性質が違うところもあって、過不足なく盛り込まれているほうがいいのかと思いましたが。

以上です。

高森委員 私も垣内委員の意見と同じですけれども、私が着目したのは、日常生活や他教科との関連、それから児童の興味・関心を高める工夫がされているかどうか、個々に応じた指導が可能かどうかという、この3点を中心に、主眼を置いて比較しました。

補充問題や発展学習面のさまざまなドリル的要素の多さというのも、やはり評価の対象になるかと思えます。また、内容、構成、コンセプト、いずれもバランスがとれているかどうか。特に日常の算数的な営みというものを題材としている部分が非常に興味を引きまして、とかく算数というと日常生活からかけ離れたところで考えられがちですけれども、実は国語に次いで、これほど多用されている学問はないのではないかと思います。そういったことが自覚できるような、児童たちが主体的に関われるような内容になっているかどうかは、非常に大きなポイントとして考えました。

また、教育長がおっしゃったように、台東区は比較的、算数教育に力を入れていますが、課題となっている応用問題の部分が、子どもたちにとっての学習のポイントとして、少し重点的にできるようになっているかどうかということも、検討のポイントといたしました。

以上です。

末廣委員 算数という教科は、やはり学年が上がっていけばいくほど、学力差がつきやすい教科だと思います。確実に基本を教え、その学年の、あるいはその単元の振り返りをしっかりしてから先に進むというようにしていかないと学力差がつくと思います。確実にステップアップしていくことが大切です。

それとともに、低学年もそうですが、特に高学年になりますと、いわゆる計算だけではなくて考える力が必要になります。応用問題がそうですね。考える力を養うということ、

やはり重点に考えて選びました。

樋口委員長 やはり実力の差が明らかにつく科目の一つでありまして、先ほど話しましたこぶの、後半のこぶのほうの子どもたちの学力、特に算数の学力というのは非常に重要だろうと考えます。

そういう意味では、使いやすい、自習もしやすいような教科書がよいという視点で選択をしました。

調査委員会の調査によりますと、この算数の教科書についてもよく調べていますけれども、盛り込まれている問題数について、上は5,300から下は2,500くらいという非常に大きな差のあるところでありまして、これを、我々はどのように評価して、教室でこの教科書を使ってもらうかということ考えた場合には、これは明らかに二つポイントがあるだろうと思います。一つは教員が教えやすいこと。二つ目は、各児童・生徒が、自分でこの教科書を使って勉強ができるという教科書が優先されるべきものと考えます。その視点で、教科書の選択をしました。

他に、よろしいですか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員の採択すべき発行者について、順位を付けてご発言をお願いしたいと思います。

今度は私から申し上げます。

私はC者が第1位で、F者が第2位とします。C者は先ほど私が申し上げました基準の中では、一番教えやすい教材ではないかと考えました。二つ目は、自習コーナーがありまして、児童・生徒自身も自分でチャレンジして勉強できるテキストになっていると考えます。問題数も、小問題数が4,000くらいで発展問題が21というところで適当であろうと考えます。

第2位のF者は、事例や理科の気温の問題への応用を挙げている点は第1位のC者と大きな差はありませんが、活字が上級者向けのよう感じがしまして、算数の好きな児童・生徒にはこの教科書でもよろしいかと思うのですが、算数に不得手感を持った子どもには、文字が活字的で違和感があるかなという感じがしまして2位にしました。

私は、以上です。

末廣委員 私は、第1位にC者、第2位にD者です。

C者は、全体的にバランスもとれていますが、算数の自習コーナーが習熟度別にあるというのが結構なことだと思います。それから、算数に関するお話や「考える力をのばそう」というコーナーもあります。それから、小問数が非常に多いということですね。他には例えば6年生で「分数のかけ算の前に小数のかけ算をふり返ろう」という、こういったアプローチですね。それから、「分数のわり算の前に小数や分数のわり算をふり返ろう」というような、まず、振り返って、そして新しいところに入っていく。前に面積の求め方を学習した図形はどうだったか、体積の立体はどうだったか、振り返りが結構ありました。

そして、日本の和算などの話もあります。算数から数学への導入は、中学校体験入学コ

ースなどの設定もしてあります。

D者については、バランスはとれていて、例えば「算数で使いたい考え方」、あるいは「ステップアップ算数」などのコーナーがあります。それから、「友だちのノートを見てみよう」とか、そういう幅広い形のものが結構あります。どの単元の初めにも、どんな学習が始まるのかと、最初に提示があるのもわかりやすいです。それから、6年生の終わりのところで、数学への扉ということで、中学校の数学へのつなぎということが考えられております。そういういい点がありますが、全体的に見ますと、C者が1位ということでございます。

和田教育長 私もC者とD者を2者選びたいと思います。

C者については、補充問題が多いという感じがしておりまして、その中身は段階別の問題が結構充実しておりまして、これは、まさに個別の進捗状況に応じたものに対応しやすいのかなと思います。もちろん算数の場合には、補充教材としてドリルなども日常的には使えるところがございますけれども、教科書の中で子どもたちにサンプルとしてこれだけ提示できているのは大きいのかなと思います。非常にバランスがいいなという印象を持っております。

それから、各教科書の巻末に問題集が出ておりまして、これが充実しております。そして、1年生から、C者の場合には分冊をしておりまして、これが結果的には内容の充実にもつながっているのかなと思います。入り口としては非常に最適ではないかなと思いました。

D者は、1年生の一番初めの段階で、数の理解を、対比を使っています。対比というのは、二つのものを比べて「たりのかな」という表現で、子どもたちに問いかけをしながら数への理解を図っているということで、非常に丁寧に子どもたちへの理解を進めているなという感じがしております。また、体積の学習の中で、本来的にはこれは触れていなくてもいいのかもしれませんが、体積の学習の発展の部分に展開図をわざわざ入れて、どういう関連があるかということも示しています。そして、各単元の最初に、その単元の問題提起を行って、問題提起と、前の単元の復習問題も一緒に並べて、次へ進むステップの足がかりにしているという意味では、評価できると思っております。

総合的に見てC者を第1位、D者を第2位にしたいと思います。

以上です。

垣内委員 私は、算数の場合、特に小学校5年生くらいのときに一つの山が来ると聞いておりまして、特にその点を中心に拝見しました。基礎・基本の定着ということに重きを置きながら、一方でわかりやすいという点も配慮いたしまして、私は第1位はB者、第2位はC者としたいと思います。

C者も非常によく構成されておりますし、独自の展開も可能な自習コーナーも設けているわけですが、B者の場合は、最初に算数でよく使う考え方といったようなものをまず整理した上で、「力だめし」や、最後に「チャレンジ」ということで、算数をどう使っていくのかということろまで、道筋を示した上で構成をしているところを、高く評価させていただきました。また、構成に関して、数と計算、それから量と単位、図形、数量

関係、バランスよく配置されているというところも評価できるかと思います。よって、B者が第1位です。

C者に関しましては、問題数も多いですし、いろいろな配慮もなされていますし、ページ数自体も多いのですが、数と計算に若干重点が置かれている形になっているというところもありました。また、見やすさという観点から、B者のほうがいいという判断いたしましたので、1位がB者、2位がC者ということにしたいと思います。

高森委員 先ほど申し上げた三つの視点から、B者とC者とD者の3者に絞りました。3者に共通して見られる部分としては、数直線を用いた問題解決の手法で、最近では多くの教科書に見られるものですが、特にC者とD者は、そのためだけの特設ページが用意されている部分が、他者には見られないところかと思います。また、C者は自習コーナーが設けられていて、補充発展学習面の土壌的要素となる小問題の数も非常に多く、評価されることではないかと思います。

一方のD者は、今、お話がありましたけれども、比較的B問題に力を入れている部分が見受けられました。それから、B者は導入の部分で、先ほどもちょっとお話ししましたけれども、日常の算数的な営みを題材として導入部分がつくられているという全体のコンセプトが評価できるかと思います。

総合的に判断しまして、やはり小問題の数が多いというのは、児童が、教科書だけで十分自習ができるという利点があるのではないかと思います。別に新たな問題集を買ったりしなくても自習、自学ができるという性格が非常に強いという部分で、C者を第1位に、D者を第2位に、B者は第3位ということです。

樋口委員長 さらに追加して、何かご意見、コメントはございませんか。

和田教育長 B者を一位に推されている方もおられますが、確かにB者は、見る限り補充問題が難度別にかなり配慮されていて、そういう面の充実はされているなと思います。私は挙げませんでしたが、そのような評価はしたところでございます。

樋口委員長 その他にございますか。

(なし)

樋口委員長 では、集計いたします。

算数について、第1位にC者を挙げられた方が4名、B者を挙げられた方が1名。第2位にD者を挙げられた方が3名、C者を挙げられた方が1名、F者を挙げられた方が1名。

以上の結果、C者に仮決定ということにしたいと思います。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、そのように決定させていただきます。

理科

樋口委員長 次に、理科です。発行者は5者になっています。各委員からご意見をいただ

きたいと思います。いかがでしょうか。

高森委員 理科に関しては、問題解決の手法が的確に示されているかどうか、身近な現象・事象との関連性が示されているかどうか、そういう点に主眼を置いて比較をいたしました。

特に観察・実験数の量や資料の量といった分量、問題解決に至る過程の説明、観察・実験の実例として写真やイラストが効果的に利用されているかどうか、話し合いの活動のヒントとなる吹き出しなどの場面が示されているかどうか、そのようなことで授業の円滑な進行や児童の学習理解に十分配慮した構成になっているかどうかという部分に着眼しました。特に最近の傾向なのだと思いますが、ICT教材、デジタル教材も授業の中で積極的に導入されていますので、そのようなことに関する項目があるかどうかについても比較のポイントといたしました。

以上です。

垣内委員 理科も当然、基礎・基本が重要ですがけれども、応用や観察、実験といった行動を伴う科目ですので、まず一つは実験の進め方、また観察などに十分配慮して、安全性も含めて十分な配慮がなされ、しかもわかりやすい、写真なども多用されている、そして資料も多いというようなことを考慮項目として考えていました。

それから二つ目は、理科には応用編という部分が必ず出てきますので、日常生活との関係、また学習を深めるという配慮が十分なされているかどうかという点についても配慮項目として考えています。

以上です。

末廣委員 以前から子どもたちの理科離れと言われて久しいのですが、やはり理科という教科は好き嫌いがはっきりしていると思います。また、実験があまり得意ではないという教員もいらっしゃるようで、ともすると実験が少なくなってしまう傾向もあるようです。やはり理科は観察、実験など、実際に物事をきちんと見る、そのような教科であると思います。どうしてこうなったのかを考えるという一連の流れがあると思うのですが、そのような部分がはっきりわかるような構成が理科では大事ではないかと思います。

やはり最終的には現象やその現象が起きるのはなぜなのかということまで、考えさせることが理科では重要なのではないかと思います。そのような観点で選びました。

和田教育長 話が飛躍するようすけれども、かつて「末は博士か大臣か」という言葉がありました。博士というのは、私たちが子どもたちには科学者のことを言っていたと思います。ニュートン、ガリレオ、アインシュタインがいて、お茶の水博士がいて、鉄人28号の敷島博士がいて、子どもたちにとっては一種の憧れの存在であったと思います。それが最近、そういったものに対する関心が徐々になくなってきている。先ほど末廣委員は理科離れが進んでいるということをおっしゃっていましたが、その理科離れの理由をいろいろと考えますと、子どもたちは身近でいろいろと不思議に思っていることが多いけれども、それを理科の授業でしっかりと受け止められていない部分があるのかなという気がし

ております。

そのようなことに対してしっかりと応えていくにはどうしたらいいのかということに主眼を置きますと、こと台東区においては、すでにご案内のように、自然環境という意味で言いますと非常に限られており、整備された公園はありますが、いわゆるワイルドな自然とは違うわけです。やはり、自然の中でいろいろな経験をしていくには、どうしても体験不足が否めないと思っております。したがって、教科書だけでそれらを補うということは大変難しいのですけれども、写真や図解、実験、このようなものを少しでも多く示せるような教科書を期待しているところでございます。同時に、最近いろいろな科学実験の最中に事故が発生したという報告が散見され、私どもとしましても、授業の最中にそのような事故が起きることをたいへん懸念いたしております。教科書の中で、子どもたちに実験の成果とともにそのプロセスの安全性をしっかりと指導できるものであってもらいたいと思っております。

いずれにしましても、理科の授業の場合には、いろいろな学習、そして問題意識の解決を図りながら、科学的な原理の活用、創作することの喜びや達成感などを味わえるようなもの。そのような観点で選ばせていただきました。

樋口委員長 特に小学生の理科というのは、関心をどうやって持たせるかが最初で、その後には観察、実験、考察してその結果、ということを勉強する科目だと思います。やはり教科書は、まず関心を持たせるようなトピックスと書き方、活字というものが重要かと考えます。私はそのような観点で教科書を選択しました。

他によろしいでしょうか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけて発言をお願いいたします。

今度は末廣委員からお願いします。

末廣委員 私は、理科に関しましては、第1位にA者、第2にD者を選びました。

A者は教科書に載っている観察や実験の数が非常に多いです。やはり、理科の特徴の一つとして、観察・実験が非常に大事なものとなり、その結果を見て、なぜそうなったのかを考える、いわゆる理科的な考え方、理論的に考えていく訓練、それが非常に大事だと思います。小学生でその基礎を養う、そのような展開になっていると思います。

また、「理科の学び方」、「わかったこと」、「確かめよう」、「学んだことを生かそう」、なおかつ「ジャンプ」、「発展」という流れでまとめられていると思います。「りかのたまてばこ」や理科的な知識、あるいは「自由研究のすすめ方」というコーナーもあります。

D者についても全体的にはそのような形になっていますが、やはり実験の数やその写真などの点ではA者のほうがいいのではないかと考えますので、1位がA者、2位がD者ということです。

和田教育長 私は、1位がA者です。これは、観察の数、実験の数が一番多いということと、資料数も他の教科書に比べて頭抜けて多いと思います。そういった意味で、教科書の中ではありますが、いろいろな体験という意味で提示するものが多いというのは、大変良い内容かと思っております。

また、実験器具の使い方や、その使い方を表示してある記載の位置が、実験の前のページに置いてあるということで、子どもたちに、実験の際に何が重要なのかということ、まず提示するという意味でも、非常にいい試みかなと思っております。

2位はD者です。非常に重要だと思いましたが、4年生以降の教科書の目次の中で、単元の分野、例えば、物のせいしつ、物のはたらき、生命、地球など、いわゆる将来、物理として学ぶ、生物として学ぶ、あるいは地学として学ぶ、そういうものの大まかな分類をあらかじめ示して、個々の単元を置いているということで、これは中学校やその先に進むに当たり非常にいい試みだなと思っております。また同時に、環境分野に関わる記述項目も他に比べると多く、A者と比べた場合に悩むところでありましたが、D者は2位とさせていただきたいと思っております。

垣内委員 私は、第1位がA者、第2位がE者とさせていただきたいと思っております。

A者につきましては、他の委員もおっしゃいましたように、資料が非常に豊富で、特に観察や実験の数が多く、理科に興味を持たせる、また基礎・基本がしっかり身につけられるという構成ではないかと思っております。特に学習を深める資料の数は、ここの全ての教科書の中で一番多いということもあり、いろいろな形で活用できると思っております。また、写真も比較的多く、わかりやすいということがあります。さらに安全の配慮も事前にしていて、注意という形で注意喚起をしているということも、実際に授業をしていく上でも非常に重要な配慮ではないかと思っておりますので、第1位はA者です。

第2位としてはE者です。A者よりは少ないにせよ、資料も比較的豊富に使われており、実験器具は巻末に置いてあります。また、マークがついておりまして、安全に関する注意喚起ということも十分にできているということもあります。話し合いということに重点を置いて、より理科への興味を深めるような取り組みがなされているということで、A者とE者で迷ったところもありますが、やはり資料の数という観点から、第1位がA者、第2位がE者ということをお願いします。

高森委員 各委員からご意見が随分出されておりますので、特筆すべき点はすでに提示されていると思っておりますけれども、私は6者の中からA者とB者に絞りました。

いろいろと視点はあると思っておりますけれども、まずA者は、各委員がおっしゃっているように、写真も多用されていて、直感的でわかりやすいつくりになっていると思っております。安全面の配慮や、観察・実験の実例がビジュアルで表現されているので、児童の学習理解には効果的に使われるのではないかという部分が非常に大きいです。

特にデジタル教材を使った活動がA者は多いようです。そういった意味でも、これからの学習のスタイルとしてこれは重要なポイントではないかと思っております。

また、E者はその次に実験数、観察数、学習を深める資料の数など、あるいは話し合いの活動のマークが多いという部分では、評価したいところです。内容的には少し発展型部分に力を入れているようです。

その他では、C者が唯一、変わったスタイルの教科書ということで、先ほど樋口委員長からもお話がありましたが、関心を持たせるという意味では、C者が今回つくった別冊ノートに着目しました。この活用は難しいところがあるかもしれませんが、子どもたちに関心を持たせるという意味では、非常に魅力的な部分だと思います。C者は活字も大きいですし、問題解決の流れも充実した分量で魅力的ですけれども、この別冊の部分が、例えば自筆ノートでも十分賄えるのではないかというご意見もあるようですので、その辺りは少しマイナスポイントになってしまうのかと思います。しかし、非常に意欲的な取り組みだと思いますので、今後の展開を期待します。

いずれにしても、第1位はA者を推したいと思います。そして、第2位はE者です。

樋口委員長 皆さんのご意見が出された結果で、私も同じ意見でありまして、A者が1位、D者が2位とさせていただきたいと思います。

A者が1位の理由は、資料の豊富さ、写真の使い方、まさに現代のデジタル化社会における教材道具の使い方という意味では、他の教科書よりも一歩先に出ているというところで評価をしました。

第2位はD者ですが、読みやすいのですが、資料の数と現代風のという観点から見て、第2位にさせていただきました。

その他、それぞれ工夫はありますが、資料の数や説明の仕方について、先に挙げた2者に比べて、現場での使い方が難しいかなという評価をしました。

以上です。

さらにつけ加えて、何かご意見はありますか。

(なし)

樋口委員長 それでは、集計いたします。

第1位にA者を挙げた方が5名、第2位にD者を挙げた方が3名、E者が2名であり、その結果、A者に仮決定いたしたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、理科に関しましては、A者に仮決定いたします。

生活

樋口委員長 次に、生活です。発行者は7者です。各委員からご意見をいただきたいと思っています。いかがでしょうか。

高森委員 生活につきましては、低学年の児童における理科や社会科への興味・関心を増すような導入的な位置づけにある教科だと思っておりますので、全体として児童の興味を引く上での工夫が見られるかどうか、また、体験を通して気づきの発見や質を高める工

夫がなされているかどうかというところを中心に比較いたしました。

以上です。

末廣委員 生活は低学年の子どもが取りかかりやすいことが大事だと思います。そして、自分たちの生活、身の回りで社会と順応すること、あるいは理科的な視点を持つこと、そのためにはどのように興味を持たせるかということです。あるいは季節の移り変わり、まちのあり方など、いろいろと視点はあると思いますが、そういうところを子どもの目でどう見ていくか、そういうところが打ち出されるといいと思います。

垣内委員 私は、生活とはその後の学年で社会や理科などに分科していく部分の、まさに最初の導入部分で、幅広い興味を引く発展的な、その導入部になるのにふさわしい構成になっているかどうかということを中心的に見させていただきました。特に、身近な人々、社会との関わりといったことに力が入っていて、写真も多用されているということが重要なポイントではないかと思いました。

また、このような幅広い科目であると、教える先生のほうがいろいろと難しい点があるかと思いますが、教科書の使い方について一つのヒントのような部分が入っていると、非常に参考になるのではないかと思います。この2点に着目して審査しました。

和田教育長 生活は、1年生と2年生ということですが、子どもたちがなじんでいない事柄を学習の対象にするということ、何となく告知する意味合いがあるのかなというように思っております。例えば身の回りのことで、学校の中を見ることが、どうして勉強なのか。そのようなことも学習の対象として意識づける。そういったことが、ひいては社会科や理科などの学習に結びついていくということだと思っております。

その意味で言いますと、学校生活の他にも地域の様子や、施設で働く人たち、そして家庭や家族、そういうものをしっかりと意識づけて学び、その大切さ、ありがたさを知ってもらう。それが、まず第一歩だろうと思います。

現代的な課題で言いますと、今、子どもたちは非常に人間関係に過敏になっているところがありまして、幼稚園、保育園から小学校に上がった際に、友達をどうやってつくるのかというようなことも、恐らく非常に緊張感を持って学校に来るのだと思います。そのようなときに、この生活科を通じて、ある程度の示唆、あるいはきっかけづくりをしてやればよいとは思いました。

台東区の場合には、地域との関わりが非常に大切な地域でもあり、これが台東区の伝統にもなっております。そういう意味でも、地域や家庭についての記述や、友人関係、人間関係の記述、写真を十分に出しているもの、あるいはそれを表現しているものに重点を置きたいと思っております。

以上です。

樋口委員長 垣内委員が言われたように、この生活というのは何を勉強するのか、やはり幅広い科目です。その一方で、児童が社会生活をどう送るかということについて、まさにこの科目で学ぶ。そういう意味では、この科目を担当する教員がどのような教え方をし

ていくのかが、非常に重要なポイントになるかと思います。

そのためには、この教科書が使いやすく、教員、指導者が児童にきちんと伝えられる教科書が重要かと思います。教科書の使い方がしっかり書かれていて、その方向でいろいろと構成がなされているものが、当然優先されるべき教科書かと思います。

その他にございますか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけて発言をお願いします。

今度は和田委員から、よろしくをお願いします。

和田教育長 まず、第1位がH者です。先ほど人間関係ということに触れましたが、1年生の冒頭部分に、友達づくりのためのマニュアルのようなものが載っていると思います。まず、一番身近なところで、隣の友達にどう声をかけるのか、そういったことを最初に置いて、自分の居場所をしっかりと、みんなと共同の同じ場所なんだという気持ちを持たせるためのきっかけづくりをしている。それを誘導しているという意味では、非常に大事な部分かなと思っております。

また、重要なところはページのサイズを変えて強調しており、非常に好感が持てると思いました。加えて、地域や施設の紹介、家族のこと、植物の写真も非常に多いということが評価に値すると思っております。そして、巻末に「まほうのことば」として、おはよう、こんにちは、ありがとうなど、その言葉の大切さ、意味合いを提示しているということがいいと思いました。

保護者の参考にもなると思いますが、1年生、2年生ではまだ十分に活字だけの図書になじめないところがありますけれども、1年生、2年生に適した活字のある絵本についても示されているという部分がいいと思いました。

第2位は、あえて言えばC者かと思っております。C者は全体に緩やかな調子ではありますが、絵が大変きれいで丁寧に書かれているということ。少しメルヘンチックな感じの穏やかな色彩で描いてあり、子どもたちにとっては、この本を見るのが楽しみになるかもしれないと思いました。

以上のことから、H者が第1位、C者が第2位ということをお願いしたいと思っております。

垣内委員 私も先ほど申し上げた観点から、第1位がH者、第2位がC者です。

H者は、身近な人々、地域社会との関わりというところを重点的に入れながら、導入部としての役割を十分に果たしているというところが一つあります。それから、写真です。特に台東区の場合、大都会の中心にありますので、なかなか植物などに触れる機会が少ないかもしれませんが、そういったものについてもたくさんの写真を入れながら紹介しているという点も評価いたしました。

あわせて、生活という、非常に幅広いこの教科を、どう教えていくのかという点で、非常に参考になるのが、一番最初の部分の「きょうかしょのつかいかた」という部分だと思

います。その点も配慮して、その点を入れ込んでいるのはH者のみといたしましたので、第1位がH者です。

第2位はC者です。C者も先ほど和田教育長がおっしゃったように、非常に魅力的なつくりになっていて、また、遊びということも豊富に盛り込まれていて、コミュニケーション重視です。非常にいいつくりになっているかと思いましたが、やはり教科書として考えたときの総合的な評価としてはH者のほうがよかったかなという状況です。

高森委員 私は、今のお二方の委員とは逆で、C者を第1位、次をH者といたしました。

確かに、この生活というのは、後の理科・社会科への導入になりますけれども、先ほど和田教育長がおっしゃったように、私たち人間が、自然、そして社会とのつながりの中で存在しているものなのだということを実感させるという意味が、この2者のポイントとして大きな項目として現れていますので、そういったところが評価の大きな点となります。

C者は、比較的その後の3年生以降に関わる理科的要素、社会的要素が多目なのかと。接続という面を考えると、C者は比較的その後のことも考えてつくられているような感じがいたしました。

その他のことに関しては、すでにお話しのありましたように、内容の充実、全体として児童の興味を引く工夫が見られ、児童の学びの参考となる学習カードの実例が多く載せられているのが、この2者ではないかと思えます。吹き出しの数や安全内容の面でも、比較的この2者は充実しているのではないかと思いました。

その辺りの長所があると考ええると、均衡がとれていて、3年生以降の接続を考えたところでは、C者が第1位で、第2位にH者を推薦いたします。

樋口委員長 私は第1位をH者、第2位をF者にしたいと思います。

理由として、まず1位のH者ですけれども、先ほどもお話ししましたが、「きょうかしょのつかいかた」が明示されていることは、現場において非常に使いやすい教科書になっていると思えます。その次に、読者への誘導がしっかりされているというところでは、まさに生活を学ぶというところで、うまく書かれている教科書かなという感じがします。

第2位はF者です。安全や防災を比較的強調しているところは、東日本大震災を初めとして、災害の多い我が国において、子どもたちに安全、防災の意識を高めながら生活を考えるという方向で教科書が組まれていることについての評価であります。

その他、それぞれに特徴がありますが、1位、2位とは差があります。1位H者、2位F者でお願いしたいと思います。

末廣委員 非常に悩みましたが、最終的には第1位をA者、第2位をB者としました。

A者は植物や動物の写真が非常に多く、低学年の子どもにはとても親しみやすいのではないかと思えます。また、巻末に「学びかたずかん」があって、行動、活動に役立つ資料、あるいは言葉に役立つ資料などがまとまってあります。それから「ものしりノート」もあり、いろいろな観察をするための視点が載っています。他にも「町のきせつ図かん」や「生きもの図かん」などのコーナーがあるのは、非常に見やすいのではないかとということで、1

位に選びました。

それから、第2位のB者ですが、これもA者と似て、生活の中の言葉を考えるコーナーがあり、写真が比較的多いことでもあります。B者を第2位としまして、A者を1位としました。

さらにつけ加えるご意見はございますか。

(なし)

樋口委員長 では、集計いたします。

第1位にH者を挙げた方が3名、C者を挙げた方が1名、A者を挙げた方が1名。第2位にC者を挙げた方が2名、B者を挙げた方が1名、F者を挙げた方が1名、H者を挙げた方が1名。したがって、H者に仮決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、H者に仮決定いたします。

音楽

樋口委員長 次に、音楽です。発行者は2者です。各委員からご意見をお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

和田教育長 ご案内のように、台東区は小学校での音楽活動が大変盛んで、ほとんどの全校がブラスバンド、もしくはオーケストラのクラブ活動を行っております。また、それを視野に入れた授業も展開をしているところでございます。

そういう意味では、基本的な楽譜の知識、読み方などは、おのずと関心が高いところですので、わかりやすくなっているものにしたいたいということと、器楽の教育の中で、その扱い方が円滑に指導できる教材にしたいと思っています。そうすると、写真などを多用して、どのような指のポジションで持つのかということ、例として十分挙げられるようなものが必要だと思っていますところでございます。

ただ、音楽の授業については、本来的にはテクニカルな部分以上に、これから社会生活をしていく上での情緒的な成長も非常に重要な部分でありまして、それをどうやって養っていくのかもしっかりと考えていかななくてはならないと思っております。

そういう意味で、まず、日本古来の伝統音楽や世界の音楽、日本の場合には明治・大正以降の唱歌などをしっかりと教えていかなければいけないと思っております。特に日本古来の伝統音楽につきましては、民謡、あるいは浄瑠璃、常磐津など当然知っておかなければいけない要素もございますので、深くはなくても日本の芸能として覚えられるよう、関心を持てるような場にできればと思っていますところでございます。

テクニカルな部分と、情緒的な部分と、本来は情緒的な部分が優先でございますので、そういうところを教えるためには、いろいろな資料、これは実際に音楽を聴くことも含めてそういう機会に接することができるような教科書を期待しているところでございます。

以上です。

垣内委員 他の教科もある程度そうなのかもしれませんが、音楽や美術といった芸術系

の活動に関しましては、就学前の状況、家族の家庭内での就学前の体験で、すごく大きな差がでるとするのは、日本でも同じ状況だと思います。

そういったことを考えたときに、やはり義務教育として音楽の教科というものの一番大事なところは何かという、まず、そういうものにあまり親しんでいなかった子どもたちもたくさんいるということを考慮しながら、音楽に親しんでもらう、楽しんで活動するという点に重点を置きたいと私は思います。

それによって、最終的に感性が磨かれて、テクニカルな部分も基本的なところは身につけて、将来の自分の人生を豊かにしていく、そういう基礎の部分形づくれるようなものにしていきたいと思います。最初から難しいテクニカルなところを重点的に行うというのは、なかなか音楽に対する興味・関心を育てる上で障害になってしまうのではないかと思いますので、どちらかという基礎的な、基本的な内容を重視していきたいと考えております。

以上です。

高森委員 音楽という字が、音をかなでると書いて音楽。音をたのしむと書いて音楽なのかもしれませんが、子どもたちに、どちらにウエイトを置いてやってもらいたいということ。確かに、技術的な部分も当然必要なかもしれませんが、まずは、音楽を楽しんでもらう形で学んでほしいと思います。

日本の音楽の文化は、歴史もありますし、世界的にも日本の歌謡曲などは高く評価されているということもあります。日本人には音楽というのは、昔からなれ親しんでいた文化のひとつだと思います。和田教育長もおっしゃったように、日本の古い唱歌や昔の歌は歌詞がとてもいいものが多いです。そうした国語科の部分とも関わってくるような意味では、この音楽というのはとても重要な科目の一つだと思っています。人間の精神面の、情緒的な部分が非常に表現されやすい領域ではないかと思っておりますので、そういった部分では、テクニカルな側面よりもむしろ基礎・基本の定着を通して楽しく音楽に触れてほしいというところから導入が設定されているかどうかということに、私は着目をいたしました。

以上です。

末廣委員 音楽、あるいは図画工作、美術というのは、その人に一生かかわっていくものであり、音楽とともに生きる、絵とともに生きると言いますけれども、豊かな人生を送る一つの要素だと思います。

そのために、やはりみんなが理解できるよう、基本をしっかり教えることが重要だと思いますし、和田教育長が言うように、唱歌やわらべ歌など、日本のよき歌、文化をしっかりと教えていくということが必要であると、そういう観点で選びました。

樋口委員長 ご存じだと思いますが、小学校では、場合によっては一人の先生が全ての科目を教えるということがありまして、特に音楽や美術という科目につきましては、先生の力量にも大きく左右されるかと思っております。

つきましては、現場で使いやすい教科書を選ぶということは、我々の重要な責務ではな

いかと思います。

教科書の調査委員会が出した意見を見ると、この2者については大きな差があり、一方は基本的な内容を重視したテキストで、もう一方は発展的な内容を重視したテキストであるとあります。我々は、これをどう評価して教科書採択するか、よく考えるべきと考えます。私は、これを重要視しながら教科書を選ぶということにしました。

他によろしいですか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけて発言をお願いします。

今度は垣内委員から、お願いします。

垣内委員 私は、先ほども申しました観点から、A者を第1位にしたいと思います。やはり、学校に入学する前から家庭の中で音楽に親しんでいた子どももいるかもしれませんが、必ずしもそうではないと思います。特に、西洋音楽に関してあまり知識がない子どもたちが入ってきたというときに、スムーズに入って行って、その楽しさを十分に理解できるような、非常に基本的な内容に沿って、わかりやすく書かれているという点は、高く評価したいと思います。特に器楽の場合は、手元を写真ではっきり見せているということもありますし、発声に関しても、イラストが入っているというようなところも、音楽の場合、重要な点ではないかと思います。

個人的には、B者も非常に魅力的で発展的な豊かな内容になっているということは評価できると思いますけれども、義務教育の小学校の教科書という観点からは、A者を推したいと思います。

また、日本の歌、それから伝統的な音楽についても、かなりのページを割いているというところも評価したいと思います。

以上です。

高森委員 ちょっと違った視点から申しますと、まずこの両発行者を比較して、先ほど樋口委員長がおっしゃったように、内容の基本的なものが多いのか、発展的なものが多いのかということでもありますが、やはり教える側も、教えられる側も、「目当て」の記述があることについて、比較的A者のほうが多いのかなと思います。この単元で学んでいくのは、どういった目的をもとになされるかということが、しっかりと示されているのは、A者です。

A者の場合、目次に掲げられている「目当て」を見れば、子どもたちが具体的にどういった活動をこれからするのかがわかりやすいことが、一つの大きなポイントではないかと思います。

それから、それぞれの歌について歌詞が両者ともついでありますが、A者は縦書きで、しかも和漢混合文です。横書きのものは、概ね平仮名だけですけれども、ほとんどの歌に、歌詞だけをピックアップした部分があって、そこではきちんと漢字と平仮名とが両方表記さ

れている形の歌詞が載っています。漢字仮名交じりの文は、見ただけで意味が取りやすいということもあるので、その歌詞の意味も一緒に学びながら、その歌に込められている作者の思いや、そこから呼び起こされる情景などもイメージしやすいような工夫がとられているのではないかという意味で、私はA者を第1位に、B者を第2位にいたしたいと思います。

樋口委員長 私もA者を第1位に推します。B者は第2位になります。

理由は、先ほど申し上げましたように、現場で使いやすいという現場からの評価もありますので、私もこれを優先して採択の選択にしたいと考えます。

以上です。

末廣委員 私もA者を第1位とします。

やはり、基本的なことをしっかり教えるということです。鑑賞曲教材に関してはB者が多いのですが、いわゆる唱歌やわらべ歌、民謡や日本の歌に関しては、ほとんどあまり差がありませんでした。あまり多すぎるのもいかなものかと思い、基本的なことをしっかりやるA者を第1位とします。

和田教育長 私もA者が第1位です。

器楽指導に非常に適しているという部分がありますけれども、先ほど高森委員から、音楽を楽しむという話がございまして、その中で、やはり、私が申し上げた唱歌の大切さというの、唱歌というのは日本人の生活ですとか自然、それから感性を非常に大切に表現したものであるわけですが、A者のほうは、先ほど和漢混合の歌詞というお話がありましたように、まさにその部分で、加えて歌詞の解説もそこに書いてあります。ともすると唱歌の歌詞は、今の子どもたちには意味不明な部分も多いかもしれませんが、解説がありますと、唱歌のよさ、旋律の美しさも一緒に体の中に入るのかなということで、私は非常にこのA者を高く評価した理由でございます。

以上であります。

樋口委員長 さらに追加してご意見ございますか。

和田教育長 B者も、唱歌や民謡でいいますと、共通教材以外のものも結構入っているようです。そういう意味で言えば、幅の広さで言うと非常に拮抗している部分があると思いますけれども、今回はA者を推させていただいたということでございます。

樋口委員長 その他によろしいですか。

(なし)

樋口委員長 では、集計いたします。

1位にA者を挙げた方が5名、2位にB者を挙げた方が2名ということですので、音楽につきましては、A者に仮決定いたします。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、A者に仮決定いたします。

図画工作

樋口委員長 次に図画工作です。発行者は2者であります。

各委員から意見をお願いいたします。

和田教育長 図画工作につきましては、そもそも授業で何を指導するのかということの原点のようなものを絶えず問われているかと思います。何と言いましても創作力も必要ですし、同時にそれ以上に鑑賞力も求められてくるだろうと思われれます。それらは単に目の前に置いておくだけでは、関心は湧かないわけでありまして、子どもたちに興味・関心を持たせるための教材がどうあるべきなのかということだと思っております。

とにかく作品を多く見せて、しかも、その意味づけ、あるいは感性的な表現等について教員が指導をしやすいような教材が必要だろうと思います。同時に、台東区の場合には、まさに日本一の美術・芸術環境があるわけでありまして、その環境を子どものうちから十分に活用し、楽しめるような教育にできるようなものを目指したいと思っているところでございます。

以上です。

末廣委員 今、教育長が言われたように、この図画工作というのは自らつくっていく、表現をしていくということ、それと鑑賞の両面があると思います。両方をバランスよく学ぶことがまず必要で、大事だと思います。

やはり台東区の環境ですね、博物館、美術館があります。それらをうまく利用できるような形で学習を進めることができればと思います。

以上です。

高森委員 図画工作科だけではなくて、全ての科目に共通することでしょうけれども、学ぶということは「まねる」という言葉から発生しているといわれています。ものを真似することから学びが始まる。そういった意味では、この図画工作の一番のポイントは鑑賞だと思います。作品を見る、その作品をよく見て分析したり、いろいろなものを感じとったりという、その感性を養うことが重要だと思います。それができてから初めて自分のものをつくり出すことができるという意味では、児童の作品ばかり提示されているような教科書では偏りがあるかなと思います。美術館や博物館に行けばいろいろものがありますから、そういうところで実物を見ているいろいろ学びを得てもらうということも大事だとは思いますが、それが教科書である程度賄えているかということをもまず私はポイントといたしました。

具体的には学習活動の目当てや見通しをまずしっかりと提示されているかどうか。それから、既習事項、過去に習ったことがきちんと活かされた題材が選ばれているか。活動内容が見られるかということに主眼を置きました。特にこの科目の重要な部分は、この教科書を使ったときにビジュアル的に見て効果的かどうか、そういった視覚的な要素も重視して比較・検討をいたしました。

以上です。

垣内委員 図画と工作ですので、プラクティスの部分もあり、既にある作品を鑑賞する部分もあるかと思いますが、この点について表現力、それから材料や用具を使って

自分で新しくつくっていく、そのバランスがとれて構成されているものがないのではないかと思います。

また、ビジュアルアーツですので、やはり見やすいこと。一目で見て、その視覚情報によって思考力や判断力がついてくるわけですから、見やすいということも評価をしました。できるだけ丁寧な写真を使った用具や材料の使い方ということも評価ポイントになったと思います。

以上です。

樋口委員長 やはり現場で使いやすい教科書、子どもたちが図画工作に親しみやすい、鑑賞も含めてわかりやすい教科書がいいだろうと考えます。

それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけて発言をお願いします。

今度は高森委員からお願いします。

高森委員 私はB者を第1位、A者を第2位にしたいと思います。

先ほど申し上げましたように、視覚的な面で、B者は鑑賞する作品を広く、見開きのページで、しかも折り込みが入ったりして、非常にダイナミックに見せているという、そういったところが評価が高いと思います。

B者の特徴としては、A者と異なって少し大判であることと関連しているのか、テキストや写真が非常に効果的に、また情報量も豊かに表現されていると思います。

また、振り返りが示されていることがB者の大きな特徴で、図画工作科の授業でも他教科のスタンダードとなっている振り返りという視点を持って提示されているという点が、教える側の立場にとっても使いやすい部分ではないかと思います。よって、B者が第1位、A者を第2位といたしたいと思います。

樋口委員長 私は、高森委員の意見と全く同意見で、この図画工作の2者は甲乙つけがたいです。唯一違うポイントが、高森委員が言われたような、振り返りの項目があって、教える側としてはこの項目において何を学ぶべきかというポイントを教科書が示しているというところでは、教科書として教員が使いやすいというところで、B者を1位ということにしたいと思います。

末廣委員 私もB者です。確かにA者もいいところがたくさんありますけれども、B者の特徴としては、プロの作品や、プロの方のコメントが載っています。アーティストから写真家、彫刻家、版画家ですね、そういった一流の方の作品、お話が紹介されていることがいいことではないかと思います。

また巻末のコーナーなどの便利なものがあると思います。そういう点でB者がすぐれているということで、B者を1位にしました。

和田教育長 私もA者とB者が本当に拮抗している状態で判断をせざるを得ませんでした。まず、地図のときにも同じようなことを申し上げましたが、B者の方がサイズが若干大きいですね。大きいからいいというものでもないですが、大きいことが生かされていると思っております。見やすいなと思っております。

また、子どもたちが図画工作の授業で苦しむのは、自分の経験を含めてですが、作品を見て感想を言いなさいというときですね。それに対して、A者もB者もそれには触れているのですが、B者のほうは子どもたちの意見の言い合いの設定をしています。それで感想を述べさせているところが、子どもたちにとっては自分の意見を触発されるいい材料かなと思いました。

以上のことから、B者を私は推薦をしたいと思います。たまたまこの中に5年、6年で載っております俵屋宗達の「風神雷神図屏風」についてはつい先日、国立博物館で展示されたばかりでもあります。偶然ではありますが、文化的な環境に恵まれている本区の特性がまた生かされればいいなと思ったところでもあります。

垣内委員 先ほど申しました観点から、私もB者を第1位にしたいと思います。他の委員の方々がおっしゃったとおり、ビジュアルアーツですので、大判であるということが非常に重要で、大きなインパクトを与える要因になったかなと思います。

工夫をされているのは、先ほど、和田教育長もおっしゃったように、鑑賞のところに「見つけたことを話してみよう」というようなコーナーがあり、場合によるとあまり図画工作に詳しくないような先生方であっても、比較的うまく子どもたちの意見を引き出すことができるような、そういう工夫にもつながるかなという点も評価いたしました。どちらも美しくてよかったと思いますけれども、B者のほうが一步リードという感じがいたします。

樋口委員長 さらにつけ加えてご意見はございますか。

和田教育長 A者も作品の展示数は非常に多く、むしろB者よりも若干多いくらいですけれども、その中身と見せ方の部分でB者のほうに力を置いてしまったということでございます。

樋口委員長 地域性についても、両方とも我が区が例として言及されていますので、そういうところでの差はありません。そのほかよろしいですか。

では、集計いたします。

1位にB者を挙げられた方が5名、2位にA者を挙げられた方が1名ということで、B者に仮決定ということで、ご異議ございませんか。

(異議なし)

それでは図画工作に関してはB者に仮決定いたします。よろしく願いいたします。

家庭

樋口委員長 次に家庭でございます。発行者は2者となっております、各委員からご意見をお願いいたします。何かございますか。

高森委員 家庭科ですから、やはり学校で学んだことを実際に家庭に持ち帰ってできるかどうか大きなポイントだと思います。最近では家にミシンがなかったり、コンロもガスコンロではない家庭もありますけれども、さまざまな家庭の状況がある中で、一通り学校で学んだことが少しでも活かせるような教材になっていけばいいのではないかと

ころで、やはりそこが大きなポイントなると思います。

垣内委員 私は家庭科というのは基礎・基本を勉強するということがありますけれども、今、高森委員がおっしゃったように、応用編という部分もあって、プラクティスなので、比較的安全性も考えなくてはいけないと思います。よって、写真でさまざまな状況を示すという点を一つ評価の基準に入れました。

また、例えば食物アレルギーの問題ですね、場合によっては非常に重篤な事故につながりますので、そういったことの記述があるか、その配慮も尊重したいと思っています。

以上です。

末廣委員 家庭科というのは生活に密着している、あるいは家庭に密着している部分が多いですが、学校で習ったことを自分の生活あるいは家庭の中で活かしていく、将来的な生活の知恵になるような、そういう基礎を養っていくことが必要だと思います。

和田教育長 今の家庭内での基本的な生活行動が大きく変化してきていると思います。例えば自分の家での調理が少なくなってきたということですが、あるいは聞くところによりますと、はたきや箒のないお宅もあるということで、基本的な掃除や料理などという概念が変わりつつあるのかなという気がします。

そういう状況で、一つは合理的な生活をどうやって進めていくかと同時に、やはり日本の伝統的な部分は何なのか、残さなくてはいけないことも意識的にあるのではないかと、いうところが一つ重要なポイントかと思っています。

もう一つは、今これだけ消費生活が多岐にわたってきますと、安全をどうやって確保していくのかということが非常に大事ですので、その注意喚起をどうやってしていくか。さらに、一番重要な部分は、家庭というものの中で家族のつながりがどうなのか。それとあわせて地域との関係あるいは社会習慣をどうやって身につけていくのか、そういうことも含めて家庭科はいろいろなことが求められているという気がしております。その中でも、食生活について、垣内委員が触れられましたアレルギーについて、栄養についてなどは非常に重要な問題です。この後に出てきます保健にもつながる問題ですけれども、その辺りもきちんと示唆をできるかということだと思います。また人権尊重の意識について、家庭科のあたりでしっかりやっておかないと、後々、中学校になってから苦しむことにもなるのかなと思っています。

以上でございます。

樋口委員長 まさに家庭科というのは個人が生活を自立するためのとても重要な勉強だと思います。自分でボタンの縫いつけをするのも必要ですし、布を縫うのも必要ですし、料理も必要ですし、掃除をするのも必要だろうと考えます。

先ほど、垣内委員が言われましたように、一方ではイラストで料理の図を出している教科書もあれば、もう一つは具体的に写真で、料理の推移を完成まで見せていてわかりやすく、こうやってやればこんな料理ができるというのを見せている教科書がありまして、どちらがわかりやすいかということについて、我々がそれをおのおの比較をして採択を行え

ればと考えます。

以上でよろしいですか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけて発言をお願いします。

今度は私から申し上げます。第1位をA者とし、第2位をB者にしたいと思います。

理由は全て写真入りでわかりやすく、料理にしても縫い方にしてもわかりやすくなっていますので、教育現場においても使いやすい教科書ではないかと考えます。

1点だけ、スクランブルエッグの作り方の部分で、卵をいためるのに中火でとありますが、自分がかつて仕事をしていた関係で卵の場合は油を多くして、高温で調理するということと私は認識していましたので、その辺りで違和感がありました。ただ、小学生の5、6年生が裁縫にしても、掃除、料理にしてもこの教科書を使っていうなら、B者に比べてA者の教科書のほうが使いやすいだろうと私は評価をしました。

和田教育長 A者、B者を比べた場合に、B者は非常に実務的な項目が詳細で充実しているなと思います。一方でA者は、もちろんそういった記述はありますけれども、家庭内での人間関係、家族のきずなのようなものに非常に上手にアプローチをして、その大切さの説明をしている気がいたします。そういう意味では、人のつながりの部分に重点を置いている部分が見えるということだと思えます。

それから、食物アレルギーについての項目が、A者には幾つか記述が見えましたが、B者は残念ながら気がつきませんでした。また、その辺りをもう一度確認しようとした際に、用語の索引を見ようとしたところ、B者は索引がありませんでした。それが残念だなと思います。索引があることによって学習効率も違うと思いますし、教科書の索引は結構重要な位置を占めているなということが感じられました。したがって、私の場合にはA者を推薦させていただきたいと思います。A者が第1位ということをお願いをしたいと思います。

末廣委員 私は、はじめB者がいいかと思っていました。いわゆる「日本の伝統」や、あるいは「プロに聞く」、災害に対する「日々の備え」というコーナーが優れていて、包丁や針、はさみの持ち方、写真で右手と左手を分けて持って見せているなど、そういうところがあってよろしいかなと思いましたが、教育長の話のように、アレルギーに関しては記載が見当たりませんでした。やはりこの時代で、食物アレルギーは子どもに注意を向けさせる必要が以前にも増してあると思います。A者はその記載があります。

そのほかの部分も基本的には、例えば安全性に関することもB者とほとんど同じ数がありますし、内容的にはB者とそれほど変わらないと思われれます。ただしアレルギーは大きな問題ですので、最終的にはA者が第1位だと思います。

垣内委員 私も、先ほど申しました観点から第1位がA者です。

さまざまな配慮がなされているということもそうですが、全体を通してページ数がそれほど多くないということがあり、おそらく、B者のほうがさまざまな情報を盛り込んだのだ

るうと思います。A者のほうは比較的絞り込んだ上で、家族や地域との共生ということをはっきりと出しているという点に特色があるのかと思いました。台東区の場合は、地域とのつながりが非常に重要ですので、こういった構成に関してはA者のほうが優れているのではないかと思いました。

また、家庭科というのはさまざまなことを自分でやらなければならないので、やはりイラストよりは写真のほうはるかにわかりやすいのではないかといいこともありまして、A者のほうを優先したいと思います。

高森委員 私も他の委員の方々と意見は同じですけれども、家庭科ですから、やはり日本における衣食住の3点がポイントだと思います。よって、食だけに注目をしてしまうと偏ってしまいますけれども、例えばアレルギーの問題も決して食事だけにアレルギーがあるわけではなく、私は花粉症でありハウスダストアレルギーですから、そういった意味では住環境というのはとても重要な部分です。いずれにしても、この家庭科はあくまでも日本で生活をしていく上で重要な知識が全部詰め込まれているはずだと思います。

例えば食事についても、日本は温暖湿潤な気候にありますから、私たちが食べるものはここにも書いてありますけれども、ご飯、みそ汁など日本のいわゆる伝統的食事が日本人の体質にあっているという部分をきちんと伝えている教科書に、両方ともなっていると思います。これが寒い国であれば、体を温めなくてはいけないから陽性食、生肉であったり、南のほうに行けば、今度は暖かい温暖な気候で、熱帯地方では体を冷やすための食事をとらなくてはいけないということで、さまざまな食文化はそれぞれの国によって違うわけですが、3者ともに日本人にふさわしい食文化が何であることをしっかりと示していると思います。

そういった中でも、例えば食品のグループとその働きの項目がありますけれども、A者、B者を比較しますと、A者は非常に詳しく載っています。B者のほうは非常に概念的なことの説明にとどまっています。A者は非常に具体的な内容にまで言及してしまっていて、実際にどういった食事がエネルギーのもとになるのか、体をつくるもとになる食品はどのようなものがあるか、体の調子を整える食品はどのようなものがあるかということが書いてあるという意味では、子どもたちもこれを見て視覚的に理解できるという部分があります。また、両者を比較した場合に、例えば調理の過程を紹介したページでは、素材を集めたところから加工、調理に至るまでを忠実に追いかけているという面ではA者のほうが比較的紙面の活用が多かったのではないかと思います。そういった意味でも、A者は紙面の使い方や、見開き両面を存分に活用して調理の過程について示しているという点など総合的にみて、内容の充実度という意味ではA者のほうが高いのではないかといいまして、私はA者を第1位に、B者を第2位に推したいと思います。

樋口委員長 その他、ご意見はございますか。

和田教育長 1点だけ。A者のいい点として申し上げるのを忘れてしまったことがあります。贈り物の項目があり、贈り物について物の価値観のようなものをここで示してくれて

いる部分がありました。例えば下級生にプレゼントをする場合にどういうものがあるのかということで、手づくりのもの、気持ちのこもったものということで例示を挙げて、これは広く、お中元、お歳暮などの社会習慣にもつながる話でもありますので、そういう意味ではいい例を出しているなと思いました。

以上です。

高森委員 先ほど、アレルギーの話が出ましたが、アレルギーのことは保健科の科目でもしかしたら詳しく触れられている部分かと思い、私はあまり着目しませんでした。

また、ぜひこれは子どもたちだけではなくて、保護者の方にも読んでもらいたい、すばらしい内容だと思いますので、補足いたします。

樋口委員長 アレルギーはやはりここでやるべきだと思います。食の問題ですので。保健は個人の健康の問題ですけど、これはいわゆる社会全体の問題でもあると思いますので、ぜひ教科書において言及をされたらと思います。

ほかによろしいですか。

(なし)

樋口委員長 それでは集計いたします。

A者を第1位に挙げた方が5名、B者を第2位に挙げた方が2名ということで、A者に仮決定したいと思います。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、家庭科につきましてはA者に仮決定ということにいたします。

保健

樋口委員長 次に保健について審議をいたします。発行者は5者になっております。各委員からご意見をいただきたいと思っております。

和田教育長 現代人にとって健康の保持がいかに大切なものなのかというのは、年を追うごとに認識が高まり、また事実として健康上の危害をこうむる場面も非常に多くなってきたと思います。毎日の子どもときからの生活状況が引いては何十年か後の自分の健康に大きく影響するという事は、統計的にも明らかになっています。そういうことが子どもたちにとって非常に貴重な学習になるだろうと思っております。まさに生活習慣病の知識を子どもたちが今から持つことは、決して過剰な指導ではありません。現に台東区でも小学生から生活習慣病についての予防の健診なども行っているところがございますので、そういうことを補強する意味でもしっかりと保健の授業の中で指導をしてもらいたいなと思っております。また、今、子どもたちの一番大きな問題としては、携帯電話などの出会い系サイトなどによって操作され、性的な問題に直面することが非常に多くなってきております。小学校のうちから正しい性的な知識、基礎的な知識を確実に持つということと同時に、自分たちの体と心の変化を通して男女の相互理解に十分貢献できるような指導をしていかなければならないとも思いますので、そういう部分を明快に、かつ深く掘り下げて

いるところに私たちは重点を置きたいなと思っているところでございます。

末廣委員 保健は人間が健康に生きていくにはどうしたらいいかということが基本的にあると思います。教育長がおっしゃるように、昔の保健と違うのは、生活の仕方によって病気になるなどの問題も細かくいろいろと言われてきて、それがまとめられています。子どもたちが生活をしっかりしないと健康になれない、健康とは何か、体と心の健康ですね、そういうものを保つためにはどうあるべきか。たばこや飲酒、薬物乱用などの問題も今、相当いわれてきて、それが教科書にも反映されているということで、今の子どもたちには体力も以前よりは回復してきていますが、いわゆる本来、小学生が持つ体力をどの程度維持できているのかという問題も含めまして、そういう観点で編集をされている教科書がいいと思います。

垣内委員 ほかの委員の方々とはほぼ同じですが、私も小学生で生活習慣病や、肥満気味であったり、問題を抱えている児童が非常に多いということに衝撃を受けておりまして、その病気の予防、特に生活習慣病についてきちんとした説明がなされているということも重要ですし、一日の生活の仕方ということもある程度教えられる、そういった教材が入っているということも評価したいと思います。

それから、やはり心の健康も昨今は非常に大きな問題になっているかと思しますので、そのあたりについてもしっかりと記述があって、できれば保健の場合も写真で、非常にビジュアルにわかりやすいという点も大事かと思しますので、そのあたりを配慮したいと思います。

以上です。

高森委員 今、垣内委員がおっしゃたように、基本的な項目がきちんと書かれているかどうかということと、情報量が多過ぎてもいけないのかなというところがあります。特に日常生活を振り返るということから学習の導入が図られている点になっているかどうかということにちょっと着目をいたしました。小学生ならではの心と体の成長に関する部分というのがウエイトを占めるのではないかと思いますので、そういった部分に着眼をして比較いたしました。

余談ですが、今再確認しましたがアレルギーのことは載っていませんでした。私が不思議に思うのは、海外の保健の教科書というのは、体と心の病気のことがもっと詳しく載っています。日本の教科書にも病気の原因、予防については載っているのですが、病気そのものがどういうものであって、どういう病気にどういう症状が出て、それに対してどういう治療法があるかということが海外の保健の教科書には比較的多く記述されているようです。日本の教科書はそこまで学習指導の必要がないと判断されているのかもしれませんが、実際に子どもたちが病気になったときに、その病状をきちんと周囲の大人や先生に伝えられるかと、そういったことも生き抜くために非常に重要な部分かなと感じました。

樋口委員長 先ほど、教育長が言われたように生活習慣病については、本当に全ての教科書には飲酒と喫煙と薬物乱用については大体共通に出ていますけども、先ほど、言われ

たように、偏食などで生活習慣病になっているという部分についての原因や記述がなく、説明がないのが非常に残念です。今、アメリカではとにかく肥満の問題については徹底をして行政が学校現場に介入して、肥満を防ぐための飲料についての規制をし始めています。こういうのができたら保健で偏食ないしはファストフードのとり方など、もう少し記述していただければと思います。あとは現場で使いやすいというところで採択の提案をしたいと考えております。

ほかにご意見ございますでしょうか。

(なし)

樋口委員長 それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけて発言をお願いいたします。

今回は末廣委員からお願いします。

末廣委員 私はまず第1位がD者で、第2位がC者です。

D者のいいところは、学習課題があって、進め方をこれでチェックをして考えるという、流れがはっきりしています。「もっと知りたい・調べたい」というコーナーが充実しています。心の健康の部分では、思春期の悩みというものをスクールカウンセラーが答えるという記載も見られます。C者は同じ思春期の悩みで、友達のアドバイスという形で悩みに答えているという違いがあります。

それから、先ほどから出ている喫煙、飲酒、薬物乱用について、これは両者ともたばこを吸う人の肺、飲酒をしている人の脳、CTを撮って、あるいは薬物乱用の人の脳が通常の人と全く違い、非常に怖いということが子どもにもよくわかると思います。

D者は「犯罪から身を守るために」や「自然災害に備えて」というコーナーもあり、それも全部含めて保健の中でいわれているということです。

それからC者ですと、「東日本大震災を教訓に」、「これからの医療」というようなコーナーもあります。また、特に熱中症に関してや、AEDの扱いに関してという部分もあります。

両者ともいいところがそれぞれあるため非常に選びにくいところがありますが、全体的なバランスからいいまして、D者を1位といたします。

以上です。

和田教育長 私は第1位がD者で、第2位がE者でございます。

D者につきましては、まず文字が大きくて、非常に読みやすいという印象を持ちました。そして、心と体の部分につきましても、非常に変化の記述が上手に書かれているということ、それと写真やイラストが圧倒的に他者に比べると多いというのが、学習をする側にとっても非常に興味、実感を持てるという意味でいいかなと思っております。

次にE者ですが、本の大きさが小さいですね。小さいのでどういうものかと思いましたが、字が若干小さ目ではありますが、中身としては非常にコンパクトにできてまして、これは子どもたちにとっても気軽に持って目を通せるもので、また中のイラスト等も非常にわかりやすく出ておりますので、D者の次はE者と思っております。

以上です。

垣内委員 私も第1番はD者、第2位順位がE者です。

D者の場合は先ほども項目についてのお話をしたときにありましたように、一日の生活の仕方のようなものがしっかり書かれていました。朝ご飯を食べるところから始まり、適度な運動と睡眠とそういった生活リズムをきちんとするという基礎・基本がきちんと盛り込まれているということ。それから心の健康や病気の予防といったこともきちんと盛り込まれているところを高く評価しました。2点目は、やはり写真が多いということです。大判でわかりやすいところを評価しました。

第2位のE者に関しましても、同じように適正体重について言及をしていたり、心の健康についてもきちんと説明をしていたり、また写真も多いということもありますけれども、D者に比べますとインパクトが少ないかなということで第2位にしております。

以上です。

高森委員 私も同じ意見ですけれども、年齢に応じて、学年に応じて内容が指導要領に沿ってつくられていると思うのですが、特に5、6年生になりますと、中学校への進学という部分もありますので、体の成長と心の成長という部分の両面がとても重要になってくると思います。特に心の成長の部分でかなり詳しい説明がされている、心の健康や心の発達など、そういった細かな説明が表示されているのは、D者ではないかなと思いました。

D者は先ほどから話が出ていますけれども、ほかの教科書と比べてC者と同じくらい大判です。大判だから情報量がたくさんあるかと思うと、意外とシンプルで、情報量は比較的バランスがとれているのではないかと思います。ですから、見やすさという面でもD者は秀逸のつくりになっていると感じました。

もう少し欲を言えば、先ほど言いましたけれども、体の病と同時に心の病ということにもちょっと触れていただきたいと思いました。小学校でもいじめの問題といったことも出てきますので、そういった部分もまた授業の中で先生方から補足をしていただけるのかなということを期待しております。

樋口委員長 私は1位をD者、2位をE者にしたいと思います。

5者とも本当に甲乙つけがたいところがございます。D者は、単元構成のまとめるところでは「ふり返ってみよう」「話し合ってみよう」「調べてみよう」ということで、各單元ごとに学習のポイントが統括されている部分が優位になったところでもあります。

次にE者ですけれども、バランスがとれていて使いやすいというところでもあります。他と比べてはそんなに大きな差はないかなと考えておりますが、強いて1位、2位を言うならば、D者、E者を1位、2位ということで採択の提案をしたいと考えております。

そのほか、追加をして意見を出していただければと思いますが、ありますか。

(なし)

樋口委員長 それでは、集計いたします。

保健について、第1位にD者を挙げられた方が5名、第2位にE者を挙げられた方が3名、C

を挙げられた方が1名ということで、保健についてはD者に仮決定ということにさせていただきます。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、保健についてはD者を仮決定といたします。

樋口委員長 以上で小学校教科用図書については全ての教科について仮決定をしました。指導課長から確認をお願いします。

指導課長 改めまして、私から仮決定をしていただきました発行者につきましてアルファベットで申し上げます。ご確認のほどをよろしくお願いいたします。

国語A者、書写A者、社会B者、地図A者、算数C者、理科A者、生活H者、音楽A者、図画工作B者、家庭A者、保健D者、以上でございます。

樋口委員長 ただいまの仮決定の確認につきまして、ご異議ございませんでしょうか。

(異議なし)

樋口委員長 それでは、以上のように仮決定をいたしました。

次に、平成27年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択について、審議をお願いします。

指導課長から説明をお願いします。

指導課長 それでは、次に特別支援学級で使用をする教科書の採択につきまして、よろしく願いをいたします。

特別支援学級の場合、児童・生徒の障害の実態や状況が年度ごとに大きく異なることから、毎年行うことになってございますが、原則といたしまして、下学年用の検定済教科書のほか、特別支援学校用の文部科学省著作教科書や児童の障害の種類、程度、能力、特性に応じて教科用図書以外の教科書、つまり一般図書を採択することができるということになってございます。どの教科書が児童一人一人により適しているかということを設置当該校で検討をしたものをもとに、資料作成委員会並びに調査研究委員会で審査・検討をいたしまして、その調査結果を報告書という形で7月11日、定例教育委員会にてご報告をさせていただいたところでございます。

お手元のA4判横の資料、様式3でございますけれども、こちらにつきましては調査内容の部分が空欄になっており、この部分につきましては既に東京都教育委員会が調査し、調査結果はお手元の特別支援教育教科書調査研究資料に記載されてございます。

なお、それぞれの学校からは松葉小学校23件、蔵前小学校16件、金竜小学校13件、柏葉中学校21件の採択につきましてご審議をいただきたいということのお願いがございます。本日、机上に並べさせていただきましたが、全てをご用意するのは難しい部分がございますけれども、一般図書はこういうものということで、見本をご用意させていただきましたので、ご覧いただきながらご審議をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

樋口委員長 ただいまの説明につきまして、ご質問、ご意見がございましたらどうぞお願ひします。

高森委員 各教科名が書いてありますけれども、それぞれ該当する教科と通常学級での教科と、当然その関連性を見ながら選ばれているものでしょうか。

指導課長 特別支援学級の教科でございますけれども、通常学級と同様の学習指導要領による教科と、知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校の各教科ということで、これは生活、国語、算数、音楽、図画工作、体育という内容で学習指導要領の中で設定をされております。

したがって、児童の実態に応じて、通常学級での教科の中身でいくのか、特別支援学校の教科の中身でいくのかというようなことについては、各学校で教育課程の中で位置づけ、指導をしているということでございます。その辺り、学校によっては各教科の部分もあれば、特別支援学校の内容でも活用をしていくというようなところになっておりますので、重複しているという部分がございます。

高森委員 わかりました。

樋口委員長 先ほど、指導課長から説明がありましたように、特別支援学級のケースにおいては、それぞれの児童・生徒の能力の現状が毎年違うということで教科書を決めるということでありまして。ですから、当委員会としては、要するに現場に選択決定を、教科書の選択の幅については、これを提示するだけで任せていければと思いますが、それで審議をお願いしたいということですね。

和田教育長 指導課長の説明にもありましたように、各学校、学級ごとに状況が異なるということで、毎年かなり大きく変化をするものでもありますし、お子さん方一人一人の状況に応じた教科書を現場の先生方がそれぞれの判断の中でしていただくのが最もよろしいかなと思いますので、これにつきましては当初の説明どおりに承認をしたいと考えております。

樋口委員長 そのほかにご意見、ご質問はありますか。

(なし)

樋口委員長 それでは、第24号議案、平成27年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択については、説明のとおり仮決定をすることについてご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 ご異議ございませんので、そのように仮決定をしました。

事務局にはただいまの審議、仮決定をした内容で議案を提出していただきたいと思いますので、ここで準備が整うまで休憩といたします。おおむね20分程度と思われませんが、もし、事務局の手続が少しおくれれば20分を超えることもあります。では休憩に入りたいと思います。

(休憩 15:10～15:30)

樋口委員長 それでは休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

初めに第23号議案、平成27年度～30年度使用台東区立小学校教科書用図書採択についてを議題といたします。

お手元に休憩前に審議をした内容に基づき、事務局より提出をいただいた議案がございます。

指導課長、説明をお願いします。

指導課長 それでは、改めて第23号議案につきましてご審議をお願いいたします。お配りをいたしました資料をご覧ください。

読み上げさせていただきます。

国語、仮決定A者は教育出版で「ひろがる言葉 小学国語」。

書写、仮決定A者は東京書籍で「新編 新しい書写」。

社会、仮決定B者は東京書籍で「新編 新しい社会」。

地図、仮決定A者は東京書籍で「新編 新しい地図帳」。

算数、仮決定C者は東京書籍で「新編 新しい算数」。

理科、仮決定A者は大日本図書で「新版 たのしい理科」。

生活、仮決定H者は教育出版で「せいかつ」。

音楽、仮決定A者は教育芸術社で「小学生の音楽」。

図画工作、仮決定B者は開隆堂で「図画工作」。

家庭、仮決定A者は開隆堂で「小学校 わたしたちの家庭科」。

保健、仮決定D者は学研教育みらいで「新・みんなの保健」。

以上の内容で平成27年度～30年度使用台東区立小学校教科用図書採択につきまして、ご審議、ご決定いただきますよう、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

樋口委員長 ただいまの第23号議案は先ほどの審議による仮決定のとおりになっております。本件についてご審議をお願いいたします。ご意見等がございましたらお願いをいたします。

(なし)

樋口委員長 それでは、これより採決いたします。

第23号議案については、原案どおり決定いたしたいと思っております。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

樋口委員長 次に第24号議案、平成27年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択についてを議題といたします。

指導課長、説明をお願いいたします。

指導課長 こちらもただいまお配りをいたしました資料をご覧いただきたいと思います。第24号議案、平成27年度使用台東区立特別支援学級教科用図書採択についてでございますが、先ほど、ご審議いただきました内容につきまして、改めて4校で使用をする教科書はお手元の資料のとおりとなります。ご審議、ご決定をいただきますようよろしくお願いいたします。

以上でございます。

樋口委員長 だいまの第24号議案について、これも先ほどの審議による仮決定のとおりになっております。本件について審議をお願いいたします。ご意見等がございましたらよろしく申し上げます。

(なし)

樋口委員長 ご意見等はございませんので、これより採決をいたします。

第24号議案については、原案どおり決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

樋口委員長 ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

以上で教科用図書採択についての議案の審議は全て終了いたしました。